
アクセストロベリー

白紙描写

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクセストロベリー

【Nコード】

N5555X

【作者名】

白紙描写

【あらすじ】

イトコと結婚するまでの物語（毎日更新）

「うっわ〜アイスが溶けてる！」

粉塵売買 コトシラは、街で買ってきたアイスを確認したのは、クビルトノノセルと言う田舎町に到着した後の事だった。

「やばいなー、腐ってないか？このアイス」

『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある商店『ハジキ』の味の良さは認めるも品質の良さは一役買ってない。アイスをペろりつくのは、家に帰ってからの楽しみとばかりに、懐に収めていたのが運の尽きだったと、改めて解釈する。

コトシラは、今年で17だ。

独り立ちもあと3日、ワクワクが止まらないのです。

「仕方ない」

一言告げて、無性にアイスの袋をこじ開ける。

「やべ、手に垂れた」

不器用なのか、ストロベリー味のそれが盛大に、手にかかるのだった。

「友達居ねーのに、この少惨事、どうにかしておくれよ……」

無情に、シヨツキング。

明日は、襦袢破壊試験が待ちかねているのに、気分転換に、ろくにアイスも食えない有り様。

ああ、いつその事、家を出て、立派な剣士になりより、勇者になつてやろうか。

…

甘くはない。そんなに、人生甘くはない。

黒砂糖よりも、甘くはない。分かっている。理解している。

世界は何を中心として、回っていると思う？

「それは、太陽を中心として、地球がグルグル回っているのだ。何処にも中心なんてない。中心は誰かが決める物なのだからだ」

決まらない言葉を言い放ち、地元を翔る。

次回

本編は、まだ始まってはいない。

続けて、

地域

地元の空気はとてつもなく、何事にも代え難い独特な味をしていた。していたのではなく、している。

何か特徴のある町並みでもなく、本当に何も無い地味な所だ。田舎という物は…

でも、無くなつては成つてはならない場所でもある。

その様にして、鑑賞に浸っていると、つかの間の出来事と、悪夢がおそつたのだ。

地面から息なり、何かが飛び出してきたのだつたからだ。

「うわ、」

凄い勢いで急展開を迎える。少しばかり、休憩したかつたんだけど、それは、待つてはくれなかつた。

「なんだ。何が起きた？考える時間くらいくださいさ！」

んなこと、言つて、体勢崩して、すつころんだ俺。コトシラは、体勢を崩しながらも現場を伺う。

するとそこには、語彙では表現できない。怪物が居たのだ。

「ば、化け物！」

その通り化け物、しかし、コトシラにはそんな語句は、関係有りません。

だつてコトシラは、背中にいつもながら背負っているはずの、大剣を所持していなかつたからです。

コレは大変です。なにが大変かと述べて説明するのなら、さつき、そうほんの今さつき、開封したばかりのアイスが地面に引き寄せられ…

クツチャクチャに、成ったからです。

「せ、せっかくのアイスが…」

残念なことです。気分転換には長すぎる散歩を得て、手に入れたアイスが、瞬きする間もなく、食べられないご様子へと変貌したからです。

衝撃的ですな。

このほんの一時の幸せを実現するために、果てしなく遠いと、錯覚する道のりを自前の二本足で、せっせと歩んで来たのにも関わらず…見れば、現実には皮肉の固まりですね。

言わんばかりに、地べたに溶け染みるアイス。

「あ、あ、ああああ…」

言葉も詰まり、話す言葉も感想も言えないコトシラ。

こうなってしまうえば、前方の語彙では表現できない怪物は、見えていません。

終わりましたね。コトシラ。

コトシラの最後は、儚くアイスとともに散ることであるじよ。さらばコトシラ。

バイバイコトシラ。

コトシラのごとは、墓場まで忘れない。

コトシラ万歳。永久不滅のコトシラは英雄だ。

：

動き始める怪獣。唸りをあげ、高鳴る罵声と憎悪と共に、襲いかかる。

距離にして、身と鼻の先。

後がないコトシラ。

旋律と穿孔が彼をみすばらしく罵る。

！

その時だった、僕らナレーターだって諦めていた刹那。

奇跡が起きたのだ。

イトコの古見子が直撃寸前の怪獣をなぎ払った。

過去形のように、怪獣は、5時の方角へ水気になり、溶けていった。

「あ、あああああ」

コトシラはまだ、アイスの棒を双眸で見つめ眺めているのだった。とても悲しそうだ。

「何していの？コトシラ？もう獣鬼は、葬ったわよ？」

獣鬼とは、先ほど、5時の方角へ飛んでいったあれだ、言わば、雑魚モンスター。

「だ、だって、お姉ちゃん。アイスが、僕のアイスが…」

イトコの古見子は、へボコトシラと違って、優秀な二刀小刀使い、とってもかっこいいです。

なので、コトシラはお姉ちゃんとあえて呼んでいる。

「何を言っているの？アイスなんて、ドコにだって、売っているじゃない」

違うんですよ。古見子さん。コトシラは懸命に歩いたあとの『あいす』が食べたかったんですよ。

噛み合わない。対人関係ですよ。もう

「おれ…おれ…」

頑張れ、コトシラ！

「おれ、自分をいじめて、美味しくアイスが食べたかっただけなんだ…けど、もう、どん底です…」

おい、コトシラ！何を言っているんだ？

「…」

古見子さん退いてる！やばい退いてる！どうにか、コトシラを正常

化しておくれよ。

「大丈夫。あなたは大丈夫よ」

大丈夫。ちょっとばかり無責任過ぎはしませんか？

「お姉ちゃん…」

ああ、読めてきた。だめだこいつ早くどうにかしないと…

「おれ、頑張る！いつか、きっと世界を取り巻く剣士に成ってやる！」

よく言った。上辺だけの素晴らしい言葉をよく言った、お前はある意味勇者だ。

次回

取り巻くそれは、更新系

「とりあえず、誰からぶつ殺しましょうか？」

「物騒な言語は控えましょう」

僕の悩みという物を赤裸々に、話しあげく、第一声がこんな調子だから困る。

もう少しばかり、優しい言葉遣いで励ましてくれないものかと、少しばかり困る。

「だってあんた、クソ弱いじゃん。だから、人を殺めて経験値稼ぎでもしたらどうよ？」

相談テーマは、明日の試験対策で先ほどのアイスの話しは、なんの関係もないただの漫才とかと思ってくれ。

「僕らのスキルがレベル数値で決まるんだとしたら、たまったもんじゃないな、試験にレベル差とか、撃破数とか、関係ないしスキルを観るから、アイツ等、」

スキル…すなわち、学歴とか資格とか。

アイツ等…審査員とか、審査員とか。

「あら？弱音を吐くのね。あなた、」

私なんて、物の数分で合格したわよ的な態度をとる。

「仕方ないだろよ、おれ、落ちこぼれとか、出来損ないとかの部類に位置する人間だし……」

生きがいと言えば、苦労のあとのお菓子や食べ物（主に洋菓子）なのだから、武道家はびっくりする。

「別に私だって、才ある人種ではなかったわ。ただ普通の凡人生だった……」

「ってか。僕より一つしか変わらないのになんて切実な話なんだ。深刻でクソ真面目な人生相談をやってるようで気持ち悪い。」

「所で、試験って聞いた感じじゃ。盛り上がりそうなイベントだけど、勿論、壮大な生き残り大乱闘とかしたちゃったりするのよね？」

「いや、違う！今年も筆記試験だ！」

「二言目は早とちりと来たか、この人は、局面での切り替えが早くて、翻弄される。」

「実技じゃないの？……なるほどね。去年がそうだったから、今年は無いか。」

「無いのではなく、筆記ね。」

「……だとすれば、まだチャンスは巡っているって事になるのか。僕、体育会系ではない方の人材だから。」

夏休みに一時ピークを迎えて、学問に禿げくんだものだ。

その所為か、冬休みはダルさと寒さのダブルアタックがクリティカルヒットしたもんだ。ペンも握っていない。

その成果は総合的に、絶対値0。
大した成果は得られないまま、猶予や期限が詰みついている。

最近、試験対攻略本なんかをペラペラしている始末だ。

「なんだか、実技でフルボッコされる方がよっぽど、ましになってきた…」

本音語るコトシラ。つまりおれ。

「頑張れとしか言えないのが、偶に傷だらけ」

日本文語を的確に連ねて語らってもらいたいな。意味が分からない。

「所でここ、僕の部屋何だけど、勝手にゲームに電源入れるの止めてくれないかな？」

昔、古見子さんに保存データ消された事があるトラウマがフラッシュバックしたため、そんな事を言うのである。

「凡人は、凡人らしく、凡人以下なら凡人以下らしくだ」

名言でもないが、なるようになれ、普通を願うのも贅沢だとか、言う方向性で語るね。

独立立ちっつてのは、保護者の管理から外れ、一人でこの世界に生きていけなくてはいけない。行政側の勝手なルール。

古見子は、どこかの警備団体に所属してるし、今回の件では暇つぶし…が妥当な選だろう。

しかし、どいつもこいつも平和ぼけで退屈だ。獣鬼なんて、相手に

ならない。

昔は、恐れるケダモノや邪なゲテモノが闊歩していたに違いないのに、人々の高度成長し続けたあげくって言い伝えた。

「まあ、どうにかしてみせるよ…」

試験落ちたところで、取って碎かれるわけでもないし、死ぬわけでもない。

僕は僕らしくゆるゆると、人生歩きを楽しむとしようじゃないか。

「コントローラー、一つしかなくて対戦や協力は出来ないが、作業をしている様子を伺うだけでも十分に楽しい」

と言いつつ、体育座りで古見子さんのゲームテクを眺める。17才。

「何よ？そんなに私のシューティング避けテクのが凄いの？」

凄い手つきで、向こうから迫る玉石を交わすわ革す。18才。

…

一人っ子の俺には、何か、物々しく暖かい光景。ああ、何だろうこの気持ち。

お姉ちゃんとかいなくて、友達とかもいなくて、ほとんど生きていく価値感が感じ取れなかった俺に、こんなにも、和やかで誰かに譲れないようなこの感覚は…

「あの子…」

カチカチ

カチカチ

カチカチ

「何よ？」

「何だろ…か」

「？」

ゲームに夢中なのは分かる、だがしかし、今日の俺は多分狂っているであろう。

「ゲームがあきたら、一言言わせてくれるか？」

何もないに等しい。殺風景な私室には、低音量の薄型テレビ音とワイヤレスコントローラー動作音とが非常に旋律を奏でていた。

俺の言葉でほのめかすのなら、混沌と無機質。

「？ちよっと、話しが読めないわ。今はなしたらどう？」

無傷でボスを粉碎する古見子。

「いいだろ、今はゲームに集中する時だ。今は集中するんだゲームに、そのあとに言いたい」

結構割れながらに、真剣に言ってみた。

「笑」

笑った。古見子は笑ったのだ。肩で笑う。

「ちよ、あんた、私を笑い殺す気？あはは、真面目なあんたが真面目口調って、本気で言っているの？」

…
全然把握できない笑いのツボだ。どう対応していか…分からない。

「まで、笑うな！笑うとはげろぞ。」

…
沈黙が走る。

「…」

ヤバっ、眼が虚ろだ！救急車！消防署！ハイライトが消えかかっている。

「よくよく考え手みただけど、アナログテレビの上に…飾りとか、どうでもいい。家具とか置いたりしてたよね。昔」

飾りはないと思うけど、何の話し？

「昔は、良かった…そんなの過去という曖昧な記憶とともに、比較した勝手な言いつけだよ。現に、私はアナログテレビ…ブラウン官のテレビの上、よく飾っていたもん。今はちよっと、寂しい…」

カチカチ

カチカチ

昔と今、…確かに、懐かしんだり、悲しんだり、するのは、過去の記憶をベースに、今にはないやるせなさ…が、そうさせているんだと思うよ…僕だって、

その瞬間、一瞬だが部屋の隅に置かれた大剣が脳裏に入る。

他人事のように言われる悲劇も、俺は17才と、短い人生で一度だけ経験したことがあった。

黒いどうしようもなく黒いは、俺が体験した悲劇の象徴だ。過言ではない…

「寂しい…か」

次回

通り過ぎた過去の記憶

ゲームを終えた彼女に僕は一言こう言うのだった。

「もし、試験が受かったのなら、何処かへ旅に行きませんか？」と…

おれの家族はみんな死んで、僕一人。

おれが殺してしまったんだ。

正気の沙汰ではない。狂っていた。

武器による呪い…それはただの言い訳、おれは、単純に心が弱かっただけだった。

狂ってしまったら、楽だろうとか、もうどうでもいいとか。

そこから生じる、報われない結果だけが残ることも考えずに…

だから、そうだった。

元から一人しかいないのに、ひとり立ちなんて…笑ってしまうよな。

けど、最後の後始末くらいはさせてくれ、殺してしまった家族とも関わりのない。

本当の意味での独りにさせてくれ。

昔の俺が志しにしていた唯一の願い。

誰とも、血縁や友達、関わる全てを無くしたいと…誰も何もいらな
いと…

「昔のあなたは可愛かったのね。」

イトコの声が聞こえたと思うと、

「答えは、『良いわよ』『よ』」

我に返れば、古見子さんは何か、言葉を返しているではないか。え、おれ、なんて言った？

「あの〜すみませんが、おれなんて言ったの？」

うろたえるより、直接聞く。

「あなたが私と共に、世界を旅するなどと言ってたわ。」

そうか、我を忘れて、とんでもない事を言ったかと思った。が、思い違い普通だ。

「その答えは？なんと返したのですか？」
確認の為、再度訊ねる。

「オーケーと言っわ」

そうか、オーケーなのか。

…

「ゲーム楽しかったか？」

なんか急に、語彙不足と話題不足に陥ったな。これは何だ？。

「楽しかった？今期もまた自己記録更新って感じで、」

あれ？いつの間にか、ゲーム機が綺麗にテレビの下に収納されている。

！
こいつは大方、凄腕収納の達人でも慣れるじゃないかと言っくらしい。
俊敏に片付ける。

「あの」「だわ」

被りもどきが発生した。

「俺から言わせてくれるか？」「いや、私から言わせて…」

やんと言っ、自己主張したい彼らなんだ…

「ど、どつぞ、そちらから、…」

控えめに譲る。これは厚意だ…

「じゃあ、宣言して良いかしら？」トシラ？

…

「いいよ、何言われようとも、大丈夫だぜ」

イトコの古見子さんは、なんだかよく分からないけど、深呼吸をし始める。この行為に何の意味があるのかは、分からない。ただ、彼女にとっては意味があることなのであるっ…

「あなた私のこと好きでしょ？」

！

何を言っているんだこいつ。
なぜ、そのような文を紡ぐ？
誤記を誤読している。…ではあるまいな。

「ご名答。大正解だ」

カッコ良く口が動く。意に反してはいはないか？

いや、体は考えよりも正直だ。そう言う、相場が定められている、
本でもって記載されていた。

一番初心に戻るんだ！おれ！

初めての出会いは、いつだ！？

思い出せない。その前にイトコとかいたっけ？その前、彼女は誰だ

？彼女はイトコの古見子さんだ！

それ以上でもそれ以下でもない！

血縁関係は若干使いだけの親戚だと断定する。

だとして、なんだ。

記憶があやふやなとか、記憶すっぱり無くなってるというか。

まず、おれ、友達がいないし。

わかった。全てが幻聴だ。

幻覚と悪夢に襲われているんだ！

よし、この話しを手っ取り早く解決する策を思いついたぞ。

「一発、殴らせる。」

暴力で下らない。幻影を葬ってやる！。

「テレ隠しの行動にしか、思えないわよ」

何とでも、ほざけばいい。今日の俺は絶好調だ。

「俺が殴りたいと言っているんだ。殴らせろ！」

明日の試験なんて、カンニングでどうとでもなる。今の俺には、過度の緊張の所為で、可笑しな幻影が前方に座りすくんでいるのが、許せないのだ！

構える。正しい構えだ。

先生に習ったからな。当たり前だ。

「…」

「そこまで言うのなら、殴らせて遣らなくはないわ」

羽織っていた。ジャージを脱ぐ。

ガサガサ

ゴクリ

「さあ、思う限りの力を握って、拳をふるうのが良いわ」

無防備過ぎる。彼女は正座。目は閉じたままだ。

「怖くはないのか？」

「怖くはないわ」

そうか

「一つ、お願いがあるのだけれど、」

「なんだ。言ってみる。」

「あなたからの質問は、何だったの？まさか、殴らせる！ではないでしょ？」

頭に浮かぶ。

「あの」「だわ」

「ああ、あれは、もう夕方出し、帰った方が良くないかって、言おうとしただけだよ」

「あら、そう……」

「いくぜ。これが真実だったら、こんな街さっさと出ようぜ」

「…うん」

バシユン、ズバキツ

……

試験当日。

なんだか、審査員思つて、いたよりも偏屈だな。

そこには、長袖長ズボンのラフな感じの男が立ちすくんでいた。

「それでは、回答用紙と鉛筆を配るから、絶対それ以外の筆記を無知あわせるなよ」

今日もいい天気だ。アイスが食べたい。

試験会場は、『我バルト王国』の首都『ノキベ』のとある一角にある『クノベラクドナス』。

王国最も領域、聖域と言つた方がいいか。

ここには、古人からの言い伝えがあつて、神が降臨し、全てをを葬り去つて帰つたという。

まるつきり、間抜けな話のだがバカには出来ない。なんせ、堅つ苦しい国の長や役人が神神神信仰心むき出しでいるからな。

めんどくさい事に巻き込まれないように、神っているが、いつ、神病院にかかるか分からない。

だからこそ、試験は筆記に置いては、有利と言つべきか。

殆ど、神類で助かると言うか、別に、簡単な訳ではないが、出て来る問題に結構、高確率で神類のワードに絞られるため、

ああ、もう、強いて言えば、簡単だ以上！

「それでは、問題用紙、回答用紙、受け取つた者、さっさと始める。

失格にするぞ！

それから、休んでいる人は即、失格だぞ！

あと、消しゴムを使用したり、鉛筆の芯が折れて記入できなかつたり、回答枠から線が飛び出したり、紙を落としたりしても失格だぞ！最後に、頑張れ。」

言いたいだけ言ってくれて、お疲れさん。悪いが俺は、今言った注意に該当するへまはしない。

どうして、そこまで自信過剰に判断できるのか疑問符を捧げる彼らに説明するなら、今の今まで、爪楊枝と墨汁だけで、授業を受けていたからだ。

それと、…

天井に張り付く蛍光灯を見上げる…

家におれを待っていてくれる人が居るから…

絶対失敗なんて出来ない…

次回

諦めるな。前をみる、

友達になれそうよ。

母は言いました、「そんな、死ねない人間に育てた覚えはない！」

問3) 上記の演出から見て、適切な応答を応えよ。

答え(神を称える

本当に、こんな問題ばかり並べていると、まるで奇人が書いた随筆の用に見えてくる。

早めの内に書き終えないと、こっちの精神が狂いそうだ。

筆記如く、鉛筆を滑らす速度は一定で周囲の音響と同調して、至極場にとけ込んでいる。

それでいてか、試験にこれまでにない集中力と可動力が追加される。怖いぐらいに…

…恐怖さえもこみ上げてくる。

考え過ぎかどうかは知らないが、アイツ等はこうして、洗脳じみた、儀式と言つべきだな、そう言った儀式を俺らに強要して忠誠心を言えつける策なのだろうか？

…手は動く。頭も働き冴えている。

この調子で行けば、確実に成功を納める。だがしかし、何かがこみ上げてくる悪寒。

気の所為と言えば、無論気の所為になるのであろう。考えても性が

ないが、考えることしかできない。まるで尋問だ。

コトシラは、ふと、何処でもある教室、訂正、聖域を視線だけを巡回させる。

…彼らは、何だ？

彼ら、僕らから観ると、彼らはちょうど視察のそれと同等な巡行を施している。

つまり、彼らとは、このお国の上等にあたり、王国の所有を有する。天皇な輩だ。

これはこれは、女々しいお嬢様までご登場の様子だ。毎年毎年こうして、低受験者共々の視察を繰り返し行われているというのなら、さぞかし退屈な動物園巡りであろう。

「彼らに、鉛筆でも投げてやろうか…」

回答紙は既に、神で覆い尽くされている、完全回答だ。終了時刻までまだ幾度か、時間が余っている。

心にゆとりが出来たからこそ、言えた口だ。それでも、つぶやきレベルでほざいた口ではある。

考える猶予もなく馬鹿な口が開いたまでの話だ。

と言いつつ、叩きどころを探す為、再度彼らを吟味。

「…」

なんだか、この街ではどう観ても浮力が違いすぎて、物理的に浮い

て見えそうな、女々しいお嬢様を取り囲む、白づくめな連中は、実際に邪魔苦しそうだし、暑苦しそうだし、観てられない。

頑張ってる熱意的なものは感じるが、残念ながら脳内で存在削除しています。

一方、女々しいお嬢様は、このお国の上王様。

とは、僕の知識からは判断しがたいが、外見から観て、肯定を呑もう。

まず、装備品からして品質、デザイン性、実用性の無さ、が一段と格別だ。次元すらも歪んで見える。

「えんぴつでも投げてやろうか…」

おっと、いけね。

少し前の音量より、若干大きめの声のため息と共に逃げていった。

念の為、顔を伏せて、平然を強する。

わきの下から、横目で様子を伺う。

幸いなことに、審査員は耳をくぐもるだけだった。

「ふ〜」

精神を落ち着かせ。顔を上げる。

！

おれは、生きていてここまでバカな奴は観たことはない。

一番始めに、一徳べきだったな。

前方に居座る。受験生。

脳内削除も完璧に、完了していたがまさかここで伏線が忍び寄るとは…

受験番号記載の番号布を安全ピンでくくりつけ、始終、落ちとかないご様子の受験生が立ち上がった。

「やってられねー、帰る」

受験生はスタスタ歩行し、教室を飛び出す。

ん？それで？

…もうおしまい？

「哀れな愚民ですわ」

お嬢様、が喋った。

思ってたより、古典的で助かる。

第三者の立場から傍観していると、世界があらさまに見えるくる。都市伝説的な受験生、その言葉だけを言うために生きているようなお嬢様。

けどけど、やっぱり俺には、アイツしかない。

早く帰って、家がどうなっているのか。

出迎えて暮れるのか。

考えるだけで満たされる。

と、そろそろ時間だ。

試験なんて言っても所詮は、紙と筆記でカキカキするだけのお遊戯なんだと実感の色が隠せない。

「え、それでは、終わりだ。終了終了、筆記を置きたまえ」

黒板の教室は、なんて物寂しいものか：

イタツ、

激痛は一瞬だ。どこかの一般生徒が放り投げたのが偶々頭部に直撃したらしい。不覚にも痛点を突かれたと述べるべきだな。

頭をさするながら、剥げていないか確かめる。

大事には至らなかったが、もしもの事柄を想像したら：それだけでゾツとする。

「コラコラ、無用に筆記を投げるではない、投げた者は失格だぞ」

へ、

は、

ざまーみろ、いわんこっちゃない。

気を抜いて油断するから悪いんだよ。先生始めに言っていただろ。紙じゃなくて神だ、筆記、回答用紙、問題用紙合わせて神と呼ぶ。

この聖域では、三つ揃って、神の私物と呼ぶらしい。既に、この情報情報は情報屋から引っ張って来たからな。

「先生、そんなのないっすよへへ」

「ちょ、聞いてないぜ。ルールをもっと分かり易く解説して欲しかったー」

観る、木偶の坊らが戯れ言を訴えているぞ。今夜の飯は美味しく頂けそうだ。

「あれ？綺麗なべっぴんさんと敵めしい近衛らはどこに行ったんだ！」

帰った、としか言えないだろ。

「四の五の言う前に、後ろから紙集める。答案用紙と問答用紙は、ゴミ箱にでも捨ててくれ、」

答案用紙と問答用紙？嗚呼、回答用紙と問答用紙のことか。

言われたとおり、二枚の用紙を握力で圧を掛け押し縮め、紙屑ポール形を整え、教室の隅に、設置されたゴミ箱に大車輪投法で放り投げる。

見事に吸い込まれる紙屑。

あれ？さっきまで、手に汗握って、記入したあれは、どこ行った？そうか、ゴミ箱に捨てたのか…

すると、後ろからえんぴつを回収する生徒が近寄る。試験が終われば、ただの他人。

…えんぴつ…を握っているぞ？この一般生徒。おれのえんぴつが欲しいのか？

変わった者もいるな、この世には。

「ほれ、えんぴつ」

「え、あ、うん」

ちよっと、挙動不審で穏やかな人。

多分、この人も苦労しているんだろうな。感傷に浸るおれ。

「では、これで解散とする」

これで終わりかと、弱なる物足りなさやっとならと終わりかと、労働感に誘われる。

「ふー」と一息切らし、

「さて帰るか、過ぎ帰るかっ」

おれは、オレてらしく。両手に何も携えずに、教室を跳びした。

この時点での僕は、まだまだ、全然知らなかった、知るはずもない。ここまで、脇役と思われ、二度と関わらないと思いきなり起きない彼らが、いずれ、深く関わってしまうことに…

次回

帰宅路につく。

ここから自由だ。

明日は面接だ。気を引き締めなくては…

僕はコトシラ。帰路に定着し、今は落ち着いた歩調で二足歩行の真
つ最中だ。

神の聖域は、王国最大の建造ビル、通称『バマクラマ』の北から斜
め八十度に広がる『自由線境界』の中央に分布している。

普段は『自由線境界結界』で一般人は観光も出来ないが、この特別
な日にだけ、場内に入場出来るってわけだ。

イメージは、なんだか安い造りのミステリーサークルにもよく似た
地上図で取り囲まれた廃墟の学校のような、如何にも、風変わりと
近寄りがたく悪趣味な仕様が施されている為、歪だ。

広さは、『マイガル広場』四個分と思っていた以上に、狭い。

教科書に載っている画像写真を見てもそうだった。

未練がましく、もう一言言うのなら、聖域内に入る時など、パスと
か、証明書とか必要ないらしく、威風堂々とポツケに財布と小銭だ
けを詰めて、ガリマタ歩行で聖域を去ろうとはしたが、

クールに外に出た。

ちなみに、おれは商店『ハジキ』道草を食おうと思っている。

時間帯にしては、午後二時を回っており、程良く、思想錯誤に小腹
が空いているような気がしていた事による、自分自身の食欲精神が
刺激され『食べたい』と思いたいが、『食べたい』と想ってしまっ

ただ。

「なぜ、思ったかって？…カナメはやはり、昨日のアイスが心残りだったから、ハハ」

自分で自分を突っ込みます。小難しい語源を並べて誤魔化すより、初めっから、アイスが食べたかったと言えば良かったんだよ。はは、ウケるウケる。

と、前方不注意でどなたかとぶつかるコトシラ。

しっかりしろ！コトシラ！

「おっと、いけね。ごん面なさい？何方さん？…」

おれ、コトシラはぎこちない体制と不バランスと揺らぐ体をおっとと、と額に手をやり、状態修正しながら、地面ばかり観ていた視線を前へ…

「すみません！」

「その前に誰だよ」

あ、

思い出した。こいつ、受験番号419番の『やってられるか！帰る！』君だ。

名前と顔を覚える習慣の無いおれでも、コイツだけは、伏線で脳内に血の気が弥立つほど印象を獲得している。

ここは尊敬と敬意を孕んで省略して、『シイク（419）』君だ。

「なんだ。シイク君か、何をしているんだい？こんな所で…」

今日は気分がいい。偏見的な彼の姿だつて許すし、立ち話もしたい気分だ。

「シイク？…キミ僕の知り合い？なんかだっけ？僕記憶に無いんだけど」

僕とは誰だ？ああ、シイクか。

「そうそう、おまえの知り合い。…で、気に障るのなら控えるけど、自動販売機の前で右往左往立ち往生しているのは…どうしてだい？」

お金を落として、茫然自失となっていたか、金が無いから邪な考えを企んでいたかのどちらかであろう。

試験中に罵声を吐いて教室を飛び出す奇人だぞ？ろくな人間ではないのは確実だ。

「あ、いや、これは、自分の情けない姿を悔やんでいただけです。」

角度を変えて、自販機を覗てみると…彼の言う通り、鏡の劣化版並みに、冴えない眼鏡がそこにいる。

「メガネの調子が悪いのか？発狂してしまうほどに、レンズの度が合わなかったのか？」

心で笑いながらも、クソ真面目に返答する。

「あ、いや、あれは…恥ずかしい所をお見せしたようですね。あれは、反抗期です」

うぶ、シイク君。羞恥心とか備わっていてほつとするぜ。何よりだ。

「反抗期？お前は、社会的に一人前になって、独り立ちとかしたくないのか？親孝行したりしないと親が悲しむぞ？」

我ながら、俺の人生観では説得力もないとんでも無い事を口にする用になったもんだ。迅速にアイスが食べたいし、今の言葉は墓場まで持って行こう。

「親？笑わせますね…うひゃ、親なんて、今の世に生んでくれて、ありがとサンキュウベリマッチって所ですよ。」

親に虐げられる気持ちは僕には、わからなくは、ない。だって、殺しちゃったもん。

「それもそうだな、親孝行はお金で解決する。ただし、それは哀しいこと…」

チラリシイクを面と向かって観ると…

メガネが覆い隠す顔は、意外と整った顔立ちにで、びっくりした。

「僕も終わっていますけど、貴方も綻びてますね…」

意外と良い奴！

「これもなんかの思し召しだ、商店『ハジキ』で美味しいアイスでも飲食しに行かないか？」

彼とは、馬が合うらしくここで分かれるのも中途半端な気がした。そこでの提案だ。嫌な感じはするが悪くはない。ただ単に、同類の磁力が働いただけであろうと察する。

「良いですね。行くとしましょうか…それと、質問があります」

そう来るか。でも、問われたら答えなくてはな。

無言で、言ってみる？の仕草をする。

「僕の知り合いではないですよね？どこで縄絵を知ったのですか？」
想像はしてた分、返答には困らなかった。

「お前の席の後ろ。…から高みの見物で知った。」

お前のその番号布は、本名なのか？妙にとつ掛からなくて、不安の汗まで垂れてくる始末だ。

「僕の存在なんて忘れてしまった方が賢明なのに、…敢えて、覚えて声を掛ける辺りから何か良いことでもあったんでしょね」

「ああ、そうだが」

王国のとある一角に徒歩で進行中。

「良いですね。僕からも何か、差し上げて良いでしょうか？」

なんだか、気持ち悪くなってくるのは気の所為か？

「

ん？消えた。

どこ行ったんだ？

おれは、その一瞬で何が起きたのがわからなかった。
何かが変わったようにも思える。

しかし、何かが変わった気配がない。さっきまで居た街並みは町並
みのままだ。

判断に、どうしようが混じるがまだ現実だ。

正気ではある。

並大抵のことらり何とかなった風に、…何とかなっている。
しかし、しかしだ。

どうして、シイクはいない？

意味が分からない、全く皆無だ。話しがつかめない。

……

やっぱりか。呪いは持続中ってわけか。

『忘れることのない』

襲いかかるか…

ま。気に悩むこともない。

バグっているのは、俺の方だからな。

この後のでコトシラは、商店ハジキでアイスを買うが当たり前付きでもないアイスに、当たりがでた奇跡は、彼の仕業がどうかなんて知るはずもない。

シイクは、一番始まりから存在していなかったのだから…

時間は経ち、我が地元と実家。

コトシラは自前の持ち合わせた。脚で故郷まで辿り着いていたのだ。

「フー、五時間ぶりの家だぜ。」

ドアノブに手をかざす。

年期の入り浸る突起は、ひんやりと冷たい温度がほとばしる。

自動ドアとか思ったら、違うんだなこれが。

「あら、何方ですか？」

何とも言えない。棒読み。

おれは心なしな、言葉に温まる派なんですよ。滑稽ですよね？

次回

明日は休め。

動静、微動だにしない。
其れ即ち、この家の動向だ。

「あの〜古見子さん？」

「何かしら？」

おれは所持品ゼロ、それでいて、驚異的な速さで家内にあがる。

ゼロではないか、財布とそれ相応の小銭がポツケに混入している。

歩いてる時は、ジャラジャラ効果音は響かなかったが家にあがると、息なり発声を上げる。

どんな構造になっているのか、これを購入した完全百円均一『マガノルノライス』に問い合わせたいと思った。
思ったただけだ。

「ここに居座ることになったのは、おれの所為ですけど、恨んでいません？」

よく見なくとも、彼女の頬はコットン繊維質のテープで痛々しい。
そこのこの間をぶつける。少なくとも確認のためだ。しょうがない。

「別に平気ですけど、問題はないわ」

恨んではいません、と答えたのであろう。

「ん？一見、前より生活感のある家の見取り図に変貌しているが、掃除等の家事をこなしたのか？」

引き出される出かけた後の記憶と、今観る、家内の景色とが一致しない。

要するに、綺麗に片付けられている。

暇なのか？思うまでもない、今なのであろう。選りすぐって腕を掛けて掃除したに違いない。

「う…ん」

一応。

「ありがとう」

午後五時、胃の内部では生半可に溶けたアイスが吸収されている頃合いだろう。

自覚はないが。

そんな、どうでも良いことを思想しながら、おれはその足で茶の間へと移動する。

この季節、外は薄暗い設定だ。現に薄暗い。

「ドットコラセット」

古見子さんが先に、こたつに和んでいる後に、カタカナ口調でゲーム機をワイヤレスコントローラーで電源を入れる。

言っておくが茶の間に、ゲーム機本体は存在しておらず、自分の遊戯室イコール寝室から、出力コードを引っ張って来てのゲーム機の起動だ。

「午前中はずっと、将棋遣っていたし、今回は『風のクロノア』+
2』でも交互プレーするか？」

説明しているわけではないが、午前中は内蔵ゲーム『将棋』を仕切りに、一手一手返しプレーしていたのだ。

「何でも良いわ。遣るなら徹底して遣るだけ」

そのノリ、おれは好きだ。
一番ゲームが遣りやすい。

秀囲氣的に。

「それでは、行きますか」

ブオン

キリキリキリ

ホワン

起動音といい、高画質と良い、最新鋭のゲーム機はとても好感覚に、
楽しめる。的確な言い方ではないが二文字で、

愉快だ。

瞬きする間もない、ロード時間にふと、思った。

多分、おれは矛盾している行為行っているのかもしれない。と、

ドコからドコまでが、矛盾しているか…言いくるめるなら、生き方についてだ。

『過去おれ』は、独りで生きていける、苦悩とお菓子さえあれば充分だ、などと言っていた用な気がする。

『今おれ』どうだろう？ほん少し、暖かいこの気持ちは何だろう？知ってはいるんだ。分かっているフリをしていただけだと…

初めっから、弱い人間で、実際にも強い人間なんて居ないのだと実感する。

これが現実。

どうしても、人間な俺たちには、そう言う者が必要なんだ。

どう言うもの？

どんなもの？

もの？

いや人

人生のパートナーが…

「聞いても良いかしら？」

「どぞどぞ、」

こたつには特殊加工を施した電熱線が取り付けられている、使用する
ときだけこたつ内の気団を暖めてくれる。

夏には涼しく快適に、

秋にはほんのり熱く、

春は、微妙に寒い。

と設定され、設計されている。

豆知識だと思ってくれ。

「夕食とかどうするの?」

把握していたわけではない。

そくなるような気はしていただけだ。

「カップヌードルとかで、良くないか? 手軽く」

健康面に配慮されていない、食品を選択する。∴彼女も読み通りだ
ろう。

おれの華麗なる朝昼晩の食事種は、

カレーラーメン弁当だ。

ーから全て、コンビ二品。

自分で言ってるて笑いそうだが、前にも同じ事で笑ってしまったので
今日は、お預けだ。

「それはちょっと、マズくないかしら?」

∴

どちらのマズいだ?

食品自体の味での過程の不味いか？

では無いと肯定しての

食品種の厳選が誤ったか？

ラーメンは嫌いか？栄養面での気遣いか？

ここは…

「分かってる、これからは健康にも気を使つよ。」

拍手ですね。なかなか言い出せないよね。僕も成長したな、選択肢の選び方…

「あら、分かっているじゃない、そう、それ」

ああ、生命再臨回数が尽きそうだ。

「はい、ぱす」

本体とコントローラーを繋ぐ紐がないため、放り投げ、手渡す。

大丈夫、彼女に任せれば、必ずゲームオーバーは回避できる。

カチャ

「?どこに行くのかしら?」

「ドツコラった、?… 憚り所にお手洗いしにだが?」

上半身を錐揉みしながら、手を突き、立ち上がり祭に、言葉を返す。

憚りはトイレ。

「うん、いつてらっしゃい」

彼女のいつもの口語が、たまに脱線してしまい傾向は敢えて、とやかく指摘しないことにした。…今決めた。

ギコギコ

冷たい廊下を一般的な要因で踏みつけ進む。

毎度毎度語らうが『歩く』が正しい表現。

ギコギコ

足音がビビったがこれはいつものことだ。年期が入った五十年前の建築物だ多少のボロは許すしかない。

ガチャ、パタン

おれが家族というモノがまだこの世に留まっていた時は、まだまだ、ガキで今よりずっと楽しかったに違いない。

仮説論類に、よっぽと近い言い方だがおれには、過去は過ぎ去るモノで未来は、大剣に貪られるモノでしかない。

願ったモノは叶ったが、きっと誤っただけの性もなく哀れで悲惨なお話なんだ。

いつもだったら、そうであろうとか、そうだったが用意られる。けど、こればかりははつきり言いたい。

ザザー

ガチャ、キイイ。

どうも俺は、脳内演説が人より二、三步得意らしい。滑稽な人生観を長々と語って何になる？

ハハ、説得力が感じられない、おれはもう、人としての何かの虫の息なんだろう。

自覚はしている、親殺す所から自覚している。とうに悟っていた。

ギコギコ

本当に名残惜しい気分だ。

体が壊れる前に心が壊れるな。

ギコギコ

「よう、元気してる？」

これは自分の声、古見子に話しかけたのだ。

「相変わらず、元気してるわよ」

あつという間に、行ったことのない初めてみるステージへ進行形で進んでいるキャラを観る。クロノアだ。

「凄いな、お手上げだ、お前が如何様を屈してプレイする人ではないとは、思うが、疑い深い……」

信じていない、訳ではないがそう言いたい。願望？

「こんな容易なタイトルは、如何様する価値がないわ」

「ってことは、何処かでこっそりしていたりするの？他のタイトルでは…」

次回

強火で三分

あらずじに、予め細工している。

ゲームは好きではなかった。好きではなかったが弄ぶのは好きだった。

イカれた事にも、おれは確実に着いていない。ゲームが俺らを、進化させ、ゲームが俺たちを縛り付けたのだ。

証拠、何も無い。

「次はおれの番だろ。貸してよ」

怒鳴るように優しく呟いた。このような高話術を磨くのは、苦難な道のりと道程とが入り浸る、険しい道筋を通行しなくては身に付けきれない賜物である。

「良いわ。取ってみなさいよ。…けどね、渡さないわ」

ムキになったら、こんなの反応を反響するのか…なるほどなるほど。

徐々に、彼女の脳内回路が手に取るように解ってくるのは、時間の問題らしい。

「そんなこと言わず、な、早くよこせ?」

有望視なもの見方で、説得と回収に当たる。

「性に合わないことは、避けるべきね…」

目を反らすようにして、アナログコントローラーを放物線上に乗せ、徒手する。

「お…わつと、」

健気なくエビフライをキャッチ。

「こつからは、おれの時代が始まるぜ。」

コタツの角に、上記の言葉をぶつけ、操作開始する。

確認もとらずに、世界観移動を選択し、強豪揃いの場所に転生を凶ってしまった。

ピュン、ビルビルビル。

わっふー。

「な、なんだ！、語彙では表現できないそれがウヨウヨいる！地獄編だ！」

画面中央の可愛らしいキャラクターが、愛くるしく悩んでいる。

ひとまず、一時停止。

「どう？コントローラーだけで電腦世界から落としたのよ？恐ろしいを通り過ぎて、有頂天が精神を駆け巡るでしょ？」

確かに、確認と同意を取らずに先走った行動は、血迷った結末にしかならないことがよく、

思い知った。

あれだけの語彙では表現できない軍勢が中央無人に、物理法則をすっぽかして、爛々乱舞を展開してしまったっては、打つ手は皆無に同等だ。

「やられたよ。おれの負けだ…」

折角、おれの気持ち悪い兼用で動きに動くコントローラーさばきを、トクと診せてやるうと思っただのに、

それっきしのそれだな。

「もしもの事は起きないと想うけど、負けたら、夕食を一緒に作ってくれるかしら？」

一方的な条件だが、拒否権は剥奪されているに同等だ。おれ自身がゲーム使用権限を剥奪したようなもんだからな。

迷ったあげく、テレビ画面、再度確認と現実逃避をする。

そこには、観るも無惨な、語彙で語源不足で表せない『それ』がウヨウヨ。

愛くるしくキャラの眼前には、『それ』がすぐそばまで来ている。

「…どうするの？…二択しか無いし、片方は自殺行為よ？」

二択とも、爆弾だ。

一つ、ゲーム再開、ぎゃー。

一つ、コントローラーを返す、ゲーム再開、ぎゃー。

後者の場合、おれの方に所有権があるため、イトコにやらせた所でイトコが無操作に、スタートボタンを押すだけでおれの敗北が決まる…。

おれは、冷や汗を欠き垂らしながら、イトコな彼女の双眸に眼球を送る。

大きく深い瞳は、おれを覗いている、…何を考えているのかは、論さえも上訴出来そうにない。

これをおれの危うい語彙量ではのめかすのなら…

漢字二文字で深林。

が俺から観てのイトコの印象だ。

「了解だ。承知した…」

少し休憩とばかりに、コタツテーブル上に置いて置いたコントローラーを手に取る。

引力の影響力交えたかのように、吸い込まれるハンド。

本気も本機も部屋の中だ！ここには、コントローラーとハンドしが

ない！

やられると分かってて、やられる！

別に良くはない。けど、悪くものない！

どちらでも良い！

一番の重要視は、やるか、やられるかだ！

「ひとまず、深呼吸させて？」

「良いわよ。止めはしない」

ひー

ふー

みっちり、リッチな気分。

よし、今なら逝ける！

今まで以上に、力いっぱいスタートボタンを叩く。

ぎゃー

終了、ご愁傷様。

「ま、けた…ぜ」

当たり前だ。割り箸を横に割ると非常に見えるくらい当たり前だ。

なにせ、眼前の迫る『それ』をどうやってよける？自問自答を返して、不可能だ。

テレビ画面の世界は幾何学的に成り立っている為、無理化が利かない。あるに会ったとしても、それ自体が世界の一部で、その道筋を通れば必ず、歪みが生じる。

必然的に成り立つ世界。テレビ画面。

出来すぎて、偶然すぎる世界。おれら。

族に言う。越えられない壁だ。

おれも、世界の理屈は了承済みだ。影響力可不可もパワーバランスも頭に刻んでいる。

そのためか、学歴は並み以下だ。それでもいいか。

「負けね…」

「ああ、完敗だよ。」

まあ、神様も許せる範囲内だろ。

おれの未来を代償に、しているのだから。

「んで？もう、真っ暗だが今何時だ？」

ホームボタンを押せば、分かることだがそんな事の為に、手を可動されるわけにはいかない。一種のプライドだ。

「体内時計を実用化なさったらどうかしら？午後六時を回った所よ…」

おれが帰宅してから、一時間しかたっていないのか…ここまで楽しんでおいて、それだけの時間軸しか…

「？どうしたの？顔色が悪いの？それとも腹の調子が悪いの？」

根回しの良し悪しいいね、腹が減っているんだよ。

「心配すんな、腹が減っているだけだ」

とりあえず、遊び場終わり。ゲーム本体の電源を落とす。

まだまだ、おれらはガキだからな。色々引き締めていかないと地獄を観る。

「と言うことだ、厨房に急ぐぞ」

兎に角、コタツから出ないと話が進まない。おれは勢いに身を投じて、螺旋の如くとコタツから脱出する。

それは、イトコも同じだ。

普通に、コタツから脱出。

トコトコ厨房に向かうおれは小学生の様に、輝かしい無邪気な姿に見えたであろう。

厨房目前と差し掛かった所で、ふと、あることを思い出す。

今日の昼は、食材がなく。蓄えていたカップラーメンで補ったが果たして、料理が出来るほど食材は貯蔵庫に在るであろうか？
「って、買い物とか行ってきたのか？貯蔵庫は、アテにならないくらい、貧困な食材量だったはず…」

期待と過度な不安が募る。

「安心して、あなたが頑張っている間に、調達してきたから…」

と言うのは、イトコの古見子だ。

古見子は、その柄に合わないと言われる、『笑み』を浮かべる。彼女はイトコだ。

類には、昨日の件での痛々しい有り様が現れている。応急処置は施してあるが…

「ああ、そうか、助かるよ…」

つまり、ありがとう。

次回

夕食おろか晩飯

外堀をありの巢が困う、考えただけで怯えてしまふ。

まさか、モンスターの肉片だったしないだろうな。だとしたら、厨房某台所が生臭くなってしまつて、それでいて、慣れてしまつてしまつた、自分を想像するだけで腐つてしまひそうだ。

おれは、冷蔵庫と対面、露わに、立ち尽くす。

相対立と対照的なおれと冷蔵庫。

取っ手は、開けんとするばかりに飛び出している。

それに対し、彼女は、どうやら何を作るのかに迷っているらしく電気のとモを目見つめている。

…それが怖いのだ。

何を買ってきたのか、言ってくれないし、何より、何を作るのか決まっていないのに、食材売り場で買いあさつた食材とは一体何だ？

考え過ぎるのは良くない傾向だ。

されど、今は慎重に行きたい。

冷蔵庫を開いて確かめるだけなのに、こんなに用事深く心の準備をしないといけないの？とか言われそうだけど、なんだか怖くて、怖くて性がないんだ。

「せめて、どういふ風な物が収納されているのかだけでも答えてく

ださい。ヒントをください。」

媚びるように頼むおれは、怖がりな哀れなお人に違いない。でも、開いたとたん：バーンと効果音と反響音に狭まれて死ぬのは嫌だ。

「発想が豊かすぎるのよ、あなた、中身は普通よ」

普通…どこまで信じていいのか、計りが必要だ。罔を忍ばせても良い。小鳥にせがむのも良い。

つて、おい。

何言ってるんだよおれ。

雰囲気に吞まれすぎだろ。何も考えず、あければいいじゃねーかよ。

かけ声と共に、冷蔵庫の取っ手を握り開門する。

ほれ

あつと言つ間に、内部を一覧出来るほどの空間が出来上がった。

…思い過ごしは、思い過ごしだったと息を吞む。

至って普通が適当とは、恐れ入る。

てな感じで、普通を連想させる品々が列を創る。

今夜は、カレーだ。

普通な品物を観ると定番色彩る『カレー』の単語が思想雇用空間にこぼれ落ちる。

これはもう、カレーで即決だ。言葉に出して、伝えよう。

「今日はレタスとほうれん草を刻んで炒めて食べよう！」

どこの口が駄弁を申す？あ、おれか。

「そんな、料理があるの？私の耳が覚えている限り、初耳よ」

当たり前の朝飯前だ。おれの口でも初口に当たる造語を想像しないと解釈がつかん。

「引いても無駄だ。これに決めたんだけ。変更は死体になっても変えられん」

壊れたか、おれの口。薄々気づいたがここまでとは…

「そこまで、大胆な発言をするのなら、そのレタれん草炒めと斬新な食べ物を作るしかないわね。それでもいいの？」

確認の意を圧す様に、返答。

心此処に在らずな発声器官は言う事を聞かずに、紡ぐ。

「料理なんて、手引き書や調合書なんか頼らずに完成させる、させてしまつが普通何だよ。」

冒険者は一度は、吐露したことがありそうな言い回しだ。

「…言うわね。なら、早く調理に当たりますよっ？」

本気で口が自動的に動いた。制御のしようがない口を、黙らせつつ。

額いて、食材を取り出す。

…冷蔵は、長時間開いたままにしておけば、節電など環境などの小賢しい勿体ないお化けがそこら辺を闊歩遊覧してしまうと妄想してしまうので、すぐ閉じる。

両手で持ち上げた作物は、低温度を維持しているため、冷ややかに手が冷たい。

まるで、凍りそうだ。

早めに急いで、イトコが用意したまな板に乗せた。

「危ないわよ、そんなに焦って、持ってきたら…勢い余って、包丁にでも突き刺さったら事故死すまされないわよ」

と、言われ申されても、両手両腕が冷たいんだもの。と言いつきは心に吸い込まれる。

「おれも手伝うよ。その法が効率に良いし」

料理が苦手そうなおれだってそこそこ、親の手伝いとかしたし、家庭科で鍛え上げたし、問題ないハズだ。

「じゃあ、米をご飯に変えて、…」

？炊飯器に電源が入っていない事に、やっと気づいたのか？

おれが冷蔵のボディを吟味していた頃合いから仕込みはしていたが、わざと電源を入れていなかった。

つて、線で観ていたのだが、まるつきし、忘れていたのか…？

「了解」

言い放ったコトシラは、炊飯器のコードをコンセントに言えるところから始め、早炊きモードで開始ボタンを押した。

達成感の無さに驚く。

もっと、手伝わせる。

「他に、手伝って欲しい作業とか在る？手伝い足りないぜ」

イトコの横顔に話しかければ、包丁を手際良く使いこなして、緑の野菜たちを切り刻んでるではないか。

流石、武器に同じ様な刃物を両手で使っているだけは、在る。

無駄に、接近したら何気なくバラバラにされてそうだ。

「…じゃあ、次はフライパンを加熱させて、私的に適温かな？と想った時点で灯油を注ぐの」

トントントン、まな板が悲鳴を上げている。

おれ、コトシラは、スライドする戸棚からフライパンを取り出す。

焔炉にフライパンをかぶせ、凹の字と似た相似でセッティングしてからの着火。

バチ、ポー

白い閃光と共に、青い炎が靡輪たる（ナビワたる）。

言っておくがただ火が着いただけです。深い意味はありません。

「…」

手伝う事がなくなり、辺りをぐるぐる放浪。

古見子さんの前に存在するまな板の家には、観るも無惨なレタスとほうれん草が広がる。

バランスを考えたのか。そこに、ピーマンとニンジンが混じっていた。

「…」

無言な彼女は、すでに準備を終えた熱たぎったフライパンの上に、まな板ごと放り込む。

ジャーっと、奇声と罵声を奏でる野菜たち。程よく、様になってるフライパン中の住人たち。

「味付けとか、どうするんだよ?」

フライパンの住人を炒めつけるイトコに聞いてみる。

「コシヨウだけで充分、でしょ?どうせ、胃袋に詰めるだけだから…」

納得のいく解答に、同意。

「明日の面接技能能力表現試験とか、あるじゃん?お前は、どんな感じで受けたの?」

試験官と試験管の事について、語ったりするのだろうか？

あ、因みに、ほぼ一対一の語り合いと思ってくれ。

変に、武道で争ったり、特技を晒したりするような荒々しい企画ではない。

単なる面接だ。

「…これ言っちゃって、良いのかしら？」

「言っちゃって、くれちゃって良いですよ。古見子さん」

背中越したが、何となく、口に出すのが恥ずかしいご様子に思える。

「将来の事とか…かな？」

そうか、そうか、夢を語ったりしていたのか。

昔の古見子さんは可愛い事を言っていたんだな。

イトコの古見子さんの事を少し知った。コトシラだった。

次回

食べ物

これは、なんて料理だ？

そんじょそこらの家庭的な実に、お手軽料理と命名した方がいいのか？

お皿似盛られたお野菜は、主食として、一品だけ。

これが始まりの先ず始めのメニューとなるのだった。

おれの日常では、弁当かそれ以外の加工食品。主に、カレーを中心として廻っている。

食品の入手方法は、近くの市場だったか、コンビニだったか…大概は、コンビニだったであろう。記憶までもあやふやになるほど、食に関してはズボラで取り留めが無かったらしい。

自覚すら、させられる。

さて、お皿に盛られた食べ物の主観的感想は止めよか、長々と語っても飯がマズくなる様な感じがするし。

装備は、右手にお箸、左手にお米だ。

つついて食べる方が寂しく感じられないと、イトコの提案で、無駄に皿が平坦で大きい。

「どうせなら、コタツの中で食べても良かったけど、今日は調子が悪いから、コタツの上で食べることにするよ」

夜になれば、より肌寒く感じられる季節なのでそこまでしてみたいモノだと、何となく、言ってみた。

「？またおかしい事を言うのね、あなたは馬鹿なの？」

とイトコに、下等動物の漢字二文字を告げられ、とつさに頷いた。

すると、安心した顔をして、今度はイトコが言葉を返す。

「…私からもおかしい事を言うておくけど、大抵の人は行儀に忠実、それは誰だつてそうであるが、基本的に何処でどう食べようが人の自由だと思っています。」

その言葉には、端から見て不愉快にさせてしまう食べ方でもよろしい、とでも言っているように聞こえた。

「…つまり、今こうして、片足でゲームを遣りながら夕食を食べても良いと？」

コタツに足を入れている為、外側からは遮って見えないが、おれの右足には、器用にコントローラーを操作しているのご様子だ。

それでいて、ゲーム見取りの画面を見ながら物を食べる、少し異様な光景がそこにはあった。

「それも許せる範囲内だと思うわ」

その言葉を聞くと、段々フリーダム化が信仰してしまい、拳げ句の果てには律儀にマナーを守る人はいなくなるぞ。

…よし、その問題を話題してみるか。

むしゃむしゃと汚らしい食い方で、論を述べる。

「あ、そうだ、今の話で思い出したんだけど、許容範囲が広いと逆に、未来が怖くないか？って話があつて…」

事細かに、話す。

「…最終的に人は自滅するんじゃないか？って、結末になつたんだよ。その意見に対しどう思う？」

ん？、話がズレてないか？ま、いつものことか。

「確かに、偏つた見方や一種の考えだけに縛られると、人を次の段階に進めないと言うし、ストレスだつてため込んでしまつたらうと…どこかの友人が言っていたけど、自滅のイッテを辿るのは、遠い未来と…言っていたわ」

やばいな、味付けコシヨウだけなのに、美味しく感じてしまつ。何でだろう？

「多分、限界を越えるのが楽しいだけなんだろうね、人類の大抵の人は…」

イトコがまとめを表す。

「話題を出して、なんだけど、話を変えて良いかな？」

おれはまた、ふと思いついたのだ。

「確認なんて、とらなくて良いわよ。好きに話を出して良いわ」
遠慮はするな。と聞き取れる。

「さつき、ゲームで二択の選択勝負が在ったが、あの語彙では表現出来ないあれはどうやったの？」

純粋な質問だ。裏技の領域を越えプログラム自体を書き換え構築したって感じだった。

「何となくよ、やってみたから出来ただけ、」

やってみたら出来た…もし、あの時彼女に代わっていたら、軽くクリア出来ていたのであろうか…。

だとすると、彼女が言っていた自殺行為はおれ自身がプレイすることで、彼女がやって入れば、僕の勝利だったのか？

いや、権利はオレに働いていたため、彼女がおれの為にクリアするハズがない。

「古見子さん、もし、あの時、古見子さんに代わっていたら、古見子さんは最後までクリアしていましたか？」

無粋な事をほざくおれ。

「さあね、あなたのために、最後までゴールしとるとは考えにくいのではないかしら？」

つまり、作為的に負けて相手を負かすとか、何で敵であるお前を、とかの話になるのか。

「ま、過ぎてしまった今となつては、何ともいえないが」

一言だけ告げ、食事とゲームに集中した。

色々、会話が続かない話題を幾つかだし、食器を一緒に片づけ、ただやることもなく。

コタツにこもつて、テレビを見ながらとつぶしていた。

おれ、基本的に何もやらないがモットーだから、洗濯とか、炊事的な事とか、最小限行っていない。

けれど、イトコは少しばかりは、家事に協力的だ。

それだけ、とても助かる。

簡潔に言つと楽になった。

これも昨日件での事件がきっかけで、始まりだったのであろう。

ここから、その事件の結末を浮き彫りと晒すとしてしよう。

一部始終赤裸々に語ると、昨日、そう昨日の夕方頃、ちょっとイカした俺が全身全霊をイトコの頬に放つたのだ。

すると、おれは大勢を崩して、頭を過つた位置にぶつけ、眠りの世界へ誘られたのである。

目が覚めれば、朝だった。
恐らく、彼女がいなかったら、おれは寒さで風邪を引いてたに違いないだろう。

普通の人でも、そのままにはしれないと思うがイトコの古見子は、おれが寝る横で看病をしていたのか、座ってゲームをしていた。

これが今日の朝の目覚めでした。

俺が思うに、ゲームの力は世界を変えられそうな気がする。

ボケていたオレは、ついついこんな事を言ってしまう。

「俺も明日の面接みたいな試験で話すテーマは、『将来』に決めたよ」

何にしようか、決めるのがめんどくさくて決めただけではない。

なんだかよく分からないけど、彼女と同じテーマで試験を受けたいと思っただけ話。

「それは、いいんじゃない？、あなたには不向きなようで意外と適材だったりしそうだし」

おれも、そのテーマでどのような結果になるのかは、全く持って皆無。

けどけど、結果が全てではない。生きてきた中で結果だけにこだわる人生で楽しかったと言える人など、数える位しかない。

結果が嬉しいわけではなく、此処まできた努力と過去の自分との比較でそう思ってしまうだけだ。？

要するに、気安く人生何て物は語れない物だといいたい。

つまり、どうにかなるんだ。

今日はよく眠れそうだ。

次回

難だろう

今日は、こんにちは
今晚は、こんばんは
おはよう？お早う？

目覚めは、そんなどうでもいいような夢をひたすら永遠にループし、悪夢のような気分で起きたコトシラだった。

額に汗を垂らして、息が荒々しく乱れていたが布団を除けて顔を洗えば、スッキリ爽快の気分には誘われた。

いつもなら、夢なんて虚像は見ないし、増しては、悪夢なんて悪い虚像はもっと見ない。

「今日は、何か、起きそうだな…」

予感や勘が的中した事なんてのも、ざらにない。でも、思う時点で思わないときより、生存率が高いと聞いた。

人の勘はよく当たる。

有りがちだ。何処でも耳にする。

と、洗面台から歩いて、居間に向かった。時計の針は六時半過ぎ。おれにとっては早すぎる起床だ。

おれにしてみれば早いが、イトコはというところ…

多分、別部屋でぐっすり寝ているのか、朝の狩りにでも出ているのか…

と言っか、おれも知らぬ間にここに馴染んでいるのは、なぜだ？

警備的な仕事はどこ行った？

しかも、更にいえば、ぼくに対する態度が最初と少し変わっているような違和感は何だ？

ま、考えるだけ無駄か。おれは知っている。そう思うだけでオールオツケーだ。

そのうちひよっこり、顔を見せてくれるであろう。

コトシラは、静かな一階立て建築の家をその足で飛び出し、家よりも静かで平穏な外の世界に立った。

…

久しぶりの早起きとはいえ、朝のまだまだ薄暗く冷たい空気に包まれる外の世界は、果たして、何年ぶりの事だろうか？

今の今まで、寂しいようで暖かい世界を観たのは何年？何十年？ぶりなんだろうか…

恐らく初めて、即ち、早起き不足。

かんだかい、野生の獣鬼の鳴き声が聞こえるが、これもまた心地が良いものだ。

今日から早起きしよう。
そう心に決めた。

決めたは良いが、実行に移せるかが不安。どうにか、なると思つと
こう。

コトシラは、至極大自然な田舎の空気を吸こみ吐く、深呼吸をする。

肺の内部に大自然が詰まってゆく。

肺は肺がパンク寸前まで吸い上げてゆき、肺が飛び出すほど、大自
然を吐き捨てた。

「ふー、戻るか」

ほんの数分の出来事だった。

家に戻れば、何も変わらないただ冷たいだけの空気が迎えてくれる
だけだった。

やっぱり、こんなもんか…

悟ったように、コトシラはため息を吐く。また、居間へ向かう。時
計の針は、もう、7時と言っても良い。
数分の出来事は、体内時計を狂わす。

「おはよう、古見子さん」

玄関前から連なる廊下の末端に、古見子はいた。
ダルそうな、足取り、昨日のあれはゲームの力だったのか？恐れる
べしゲーム様だ。

「おはよう」

一言、文字じゃこんなだが力が入りきっていない。

どうしてだろう？理由は知っているがわからないことにした。

「あゝダルい、ダルい」

と言いつつ、自室からコントローラーを手にとり、居間に再度方向を向け変え、歩行中にコントローラーの起動キーを叩いて、ゲーム様を起こす。

ダルさを表現するために、ナチュラルに首に手を添え、首を傾げる。

端から見れば、あいつ、露骨にダルそーにしてっぞ、とか思われるレベルで自然体でダルさ加減をアピールしている。

何のためだよ！と聴かれても、自分の為って答えるさ。現にダルいから。

此处で語らせていただくのなら、疲れた体を無理して、平然たる様子を装っても、さらに疲れるだけで、周りの人々に、不愉快と言うなの災いで危害が及ぶ。

だったら、ダルピールしか無いだろ。

と自問会議の結果でそうさせて頂いています。

「よっっ」

7時ちょうどに、コタツに居座りゲームを開始する。

この姿を誰が観ても思うだろう。朝からマイナーなゲームをやる奴とか奇地害（きちがい）この世界では、このような漢字が使われる（だって…

けど…

好きな物は何物にも代え難い、んだよ。

と言ってみる。

別に、好きではないが遣りたいからただやっているだけであって、別に、普通だ。

カチカチ

カチカチ

「あら、コトシラ君は朝から熱心な事ね」
そこに、イトコが参加した。

「熱心とかじゃなくて、日課かな」

否定する所を誤ったが、
意味合いはこっちの方がカオスだ。

「なら、邪魔しちゃ不味いわね。…朝ご飯でも、作っとくからごゆ
つくりどうぞ…」

「さて、おれにも作らせる。朝食を」

反射的に、言葉がはらんだ。おれ自身も理由が分からない。

「…分かったわ、」

んで、片手でゲームを遣りながら、
なんだかんだで朝飯を作っちゃって、食べた。

料理内容は実にシンプル。パンにざるそば乗せるだけなので…

「古見子さん、これ結構不味くて、美味しいです」

ゲームの遣りすぎか、味覚が狂ったのかもしれない。

「奇遇だわ、私も美味しく頂いているって感じだわ」

…

逡巡たる一瞬。

それには理由がある。

それは、昨夜の昨日まで遡れば分かる。

僕たちは、一度ゲーム世界に呑み込まれたからだ。

それで全ての疑問が解ける。おれが観た悪夢も、彼女がおれより遅く起きてきた事も。

回想

あれは、おれらがボケてテレビ画面を長々と虚ろな目で視聴していたその時に起きた。

「そろそろ、寝るか…」

理屈は睡魔が襲ったから、

「良いわ、賛成」

道理は彼女も眠いから。

錐揉み混じりに、立ち上がろうとした。

「！」

いきなり、日中逆転や重力が逆転したかの様に、視界が歪んだ。

言葉が出ない。常識的に、それが道筋って奴だろう。

蛇に睨まれたカエル然りと恐怖で一時的な言語生涯が起きたのであろう。

「ん？ここはどこだ？」

始めてみる場所だ。なんだかんだ、何処かの平面世界のようだ。ゆとりが感じる。

ガサ、

何がなんだか、状況がいまいち理解出来ていないコトシラの背後に、邪悪な物体が蠢く。

「どうしようかなー、北がどっちか分からない…」

学校の授業で習った、拉致された時の為の方角把握訓練で上位クラ

スだったオレでも、確実に、磁気の歪んだ空間では、その力を発揮できない始末。

常識上これは異常だ！意外の単語が浮かばれない。

コトシラは頭を掻いて、如何に困っているアピールを取る。誰か、が助けしてくれるかもしれないを装って…

ズバッ

邪悪な物体は、それと同時に動き出した。襲いかかった。が適切であろう。

第三者の視点からは、絶体絶命が正しい…はず

次回

死なないハズ

此処がゲームの中だと誰がいえようか？

定理で語るなら、ここは非常に別世界で在る確実が高い。
洞察力や判断力が無くとも、知っている人はすぐさま理解するはず。

ゲームと言つ名の電腦世界。

電腦世界とは、有りつ丈の導線回路の集合体。言わば、人の頭と同じ、もしくはそれ以上だったりする。

どうして、ここが電腦世界で有る…と断定出来るか、判断出来るか、の冒頭で聴かれたのなら
オレは素直に、おれの元居た世界には有り得ない物を観てしまったから…だと、答える。

即答の領域だ。だってそうじゃないか？常識的異常な現象を目の当たりにしたり…いや、現に『何ら違う世界』に飛ばされた自覚が有るから、これは確認の一つか。

コトシラの眼中には、邪悪な化け物の姿をはつきり捉えていた。

その化け物は、知ってはいるがコトシラが知ってる限り、こんな事は起きたりしない。

ゲームのモンスター。

それがコトシラの眼中に映し出されているのだ。

先ほど、前。

コトシラは、背後から襲いかかる化け物を難なく蹴り倒し事なきを得た。

問題は其処からだ。

物理的にもあり得ない世界に居たコトシラでも、次元を渡ったり、時間を跳躍しり、する事なんて出来るはずもないと思ってたからさらにたちが悪い。

風の感触がなく、空調の音が無機質、増しては空気の温度が感じない。

数日間、この世界をさまよえば確実に、精神が朽ちる。

大変なことになった。言わなくても分かる焦りと緊張感、落ち着く事なんて彼には出来ないと思われるが、この様な状況下に限って、彼は平然だ。

逆に、この場を楽しんでいる。

「所で何か、ヒントはないのか？」

ゲーム世界に入ってしまったえば、本当の意味でのゲーム感覚に陥るのであろう。

彼はそう唱えた。

辺りを巡視しだす、コトシラ。

ヒントなんて物は転がっては、くれない。

だから、探す。

周りを見回すような詮索は、かなり有能ではない。状況把握の一つとして、役には立つが、彼が探しているのは、そんな安い情報ではない。

彼が最も探して、見つけるべき代物は…

元の世界に帰ること。

もしも、思想が脱線してもその目標に、必ず、辿り着く。

もう、物凄い確率で辿り着く。

絶対なんて無い。そんな哲学はほつといて、まず、家に帰りたい。

普通に思ったりしないか？

と、コトシラの脳内会議で可決が下された。

「誰か居ませんかー」

大声で自分以外の人間を呼ぶ。

…

返答なし、おまけにヒントもない。

どうしたものか、とコトシラは悩みに悩み満ちて行く。

「とりあえず、手当たり次第に、さすらいとしよう」

先ほど来た世界に、手当たり何であるのか？手がかりも無いくせに
生意気だ。

進行方向は、適当に決めただ歩む。

よく出来た世界のため、歩くとチタチタ音が鳴る。ここまで耳障りな足音は聴いたことがない。設定などで効果音等のポリウムを消すか、減らすか、したいものだ。

ふと、またしても怪物が現れた。

グガー

おりゃ、シュワー（蒸発）

どうやら、えぐい死に様を拝めることなく消えてくれるらしい…

最初の化け物は、気絶させただけで外相に何ら変形のない容姿でくたばっていたから、視野に納めることは出来たが、そう何匹も観たくはない。

気が狂い出す病の魔の手が侵攻してはしまつからな。このシステムは認める。

と

三匹目

は、シュワー

…一方的に、殴ったり蹴ったりしているけど、これ、これくらったら、どうなるの？

疑問符を浮かべるコトシラは、まばらに発生する闘技のルールに関してよく知らない。

「ま、一撃でも攻撃をもらえば、即死って事だろ」

気になるのは、その後、僕は何処へ行ってしまうのだろうかと言う概念だった。

敗者復活は、システム上に存在するのか？と前提を肯定した上で、何度まで再起出来るのか…

ますます、不安要素はつるばかり…

誰とでも話せるのは、良いことだが、おれにはまず、周りに人がいない。

どうすんの？

その果てに何が待っているのか、よく分かる。人の温もりや愛情が行き届く事なく滞り、残念な人は沢山観て来た。

終わりは目の前だ。

悪魔の囁きだつて聞こえる気がする。

うわ、やべ、涙も出てこない。

「う、うあああああああああ」

土下座に近い物腰で大地へばる。

心は平常だが、体がそれを保とうとしたい。いかにも滑稽な姿が誰の目を通して、印象は綻んだ哀れ人と思うだろう。

最悪だ体が言う事を利かない。これで自己紹介したら、第一声に、『うああああああああ』が飛び交い、笑いにもならない。

此処まで体が正直だと、正直、思わなかった。

イトコの古見子さんが助けにでも来てくれたら…

贅沢を言っているのと言うのなら、試験中、大声を出したシイク君でも良い。

… 貴族なお姫様でも良い。物静かな青年でも良い。

誰か、声を掛けてくれ…

…

沈む。視界はうっすらとはっきりしない。落ちていく感覚とほとんど同じ。

バイバイ。おれの人生…

…

「何してやるの？」

「精神的に参っていたんだ」

「おかしな子ね？医者に相談することをお勧めするわ」

「ああ、その心配は、もう決着が付いた。」

「？つまり、直ったって事？」

「勿論さ」

その声は、イトコの聞き慣れた声。

はつきり言って、聞き慣れすぎたって感じた。けれど、そんなのどうでも良い。

コトシラは、ズボンに付着する、妙にリアリテイのない土は払いながら、立ち上がる。

絶対何処かで、期待していただけあって、いざ登場してきても、何でもなかった。

無かったとは、無感情類いではなく、何かの変化が起きなかったと言っ言い回しだ。

始めっから、演技だった…てことはない。

此処で終わってしまえば…それはそれで、其処までだったって事。

「古見子さん…」

おれは、この言葉に、お礼を言わないとな。何時だって、気持ちを伝えられる。

「ありがとう…」

「…」

声は聞こえる。そこには居ないが、聞こえてくるって事は、おれの言葉だって、聞こえてくれているはずだ。

文法が正しいとか正しくないとかそんなの関係ない、そんなの要らない。

気持ちを込めれば、何時だって何処だって、絶体絶命の最中だって、…繋がる。

…かもしれない。

うん、多分きつと、そうだ。

「お礼を言われるのは、これで二回目何がするわ…」

次回
帰る為

「今の話をまとめると、ここはおれが愛用していたゲームの中つて事か？」

長々と話すこともない彼女は、淡々と状況を話してくれた。おれは、何故か理由は知らないがゲームの中に迷い込んだらしい。

「そうよ」

と彼女。

この声の発生源は、何処なのか、見当も憶測も掴めないが、見えな
い発信機から聞こええると思えば気にならない。

さっきのさっきまで、無言で反応もなかったのも、あちら側では、
一生懸命おれの行方を探していた。とか。

まさか、ね。とかも言ったに違いない。

此処は一つ、良くやったと誉めるべきだな。

「…でもよ、見つけるのが困難では、なかったか？ゲームの中なん
て、馬鹿馬鹿しくて、思ったとしても調べる場所ではないだろ？…
次元的に」

現状がこうだから、違和感ありげな質問に仕上がってしまったけど、
正論だろ。

「それを私に言わせて、何になるの？…そうね…強いて言えば、愛の力とか…」

言ってくれたな、古見子さん。こういう場面では、聞こえなかった事にするが吉だな。

「ふむ。…そうかそうか…話、変わるけど、此処から出る方法とか考えてないか？」

この世界のことだ、色々歪んで綻んだりしそうで、早めに対処しないと…いけないからな。

「その件に関しては、大方、見切りは着いているわ」

お、頼りになるな。これだから優秀さんには、勝てない。

「このゲームを壊す。」

あれ？ブレてないか？

「壊すのは、止めておくれよ…」

弱々しい声の主は勿論おれ。

「あら？それが駄目なら、このソフト内のエンディングを迎えれば、外に出られるの推測の方がいいのかしら？」

全然そつち…いや、冷静に考えるとこれは難儀な事ではないか？

「セーブデータまで飛んで一気に、エンディングって、荒技を実行に移すことは出来ないか？」

ゲーム高かったし、壊すのは可哀想だからな。こっち除けで動いて頂きますです。

「ちょっと待っててね」

無言で返答。待っている間は、レベル腕慣らしのため、雑魚を一、二匹殺める。

セーブデータで飛んだりするのは、難儀だから他に、まだ何個かあげられる。

五体満足に生まれたおれでも武器なしで、奴らを相手にするのは、厄介だ。

もしこれが、一度負ければ、戻れないようなルールであるのなら、おれは心構えをしなければならない。

この世に限界は存在するし、制限だらけだ。

…ん？今の発言には矛盾が生じてないか？

「…もしもし…コトシラ君？」

「はい、何でしょうか？」

また、脳内会議を繰り広げ展開していたのかおれは…

「出来るわよ、移動…と言つのかしら？一番最下層の最後の敵の手前とかまで…」

なるほど、初っ端からラスボのお出ましか。ちっとも面白くないが、こんな所にいる時点で面白くないことには変わらない。

「気回しは無用だ。そこまですばしてくれ、遠慮なくな。」

一度は言ってみたかった言葉だ。おれ言つと、結構滑稽。

「わかりました、それじゃ、遠慮なくな、飛ばさせていただきますね」

…
飛ぶ。それはどんな感覚なのだろう…生まれ出から一度も飛行機などに乗ったことのない、田舎生まれのおれに、その言葉は何処か現実味のない物に感じる。

…
すると、体が人為的に軽くなる。
瞳孔を開き、瞬きもせずに観た感覚だと、下手に鈍く視界が捻れ淀むのが分かった。

一瞬の内に、夢を観ているような力オスな記憶の世界。そこには、今までの不幸や苦悩や災いなどの負の記憶しか蘇らない。
まるで、生きてきたすべてが負だったように…。

「！」

立ちすくむのは、壁。

いまこの場所は、最下層のはず。だが、何かが違う。

「マズったわね…」

些か、頼りなく聞こえる声。

何がどのようして、マズったのか。

推理するには、材料不足。

まあ、前方が壁だから後ろを覗けば何か分かるかもしれないな。

そんな悠長なことを思いながら、翻り、表を向く。

「な…」

愕然の二文字。語呂は四文字。実際言った口は、な…の一字。

『何』とはよく使われる文字だ。何でもかんでも、『何だ』とか、『何だつて』とか、複数に用途があり得る可能性無限大の完全無欠のワード。

コトシラの眼前には、似たような景色が広がり魅せていた。

何故、何だか何となく、世界が一時停止していた。

その答えは分かるような気がする。

古見子さんだ。

コトシラの位置から、見える限るの視界に無数の『それ』がいた。

「語彙では表現できないそれ…」

絶望感と茫然自失の二通りの情感で、彼を襲う。

立っているのがやっと…

素晴らしい言葉だ。どれだけ、慌ただしいがやるせないこの状況を説明できる。

もう終わりだ。無理に違いない。

最悪の状況下、面白くて笑い出しそうだ。

笑ってみるか…

「うあああああああああ」

しっかりと発音のとれた、哀れ声。いま現在の演出にピツタシだ。将来演出家にでもなるうか…

「はあはあ、古見子さんきいてますか？…」

きつと、イカレきつた、おれを観て引いるのであろう。恐らくは、愛想尽かして、帰ってしまったのだろう。

だとしてもだ。

この場が俺の墓場になっても、これだけは伝えよう。

「おれは、古見子の事が好きでした、大好きで…！」

聴いて無くとも聴いててもだ。

「色々と守られてはっかだけど、此処でオレがくたばったら、くた

ばったで、あの世で今度は、おれが持つてやる!」

ある意味格好悪すぎて、誰にもいえない言葉が俺の意志に逆らって飛び出す。

これが本音なのだろう…

「よし!!、おれ、逝つてくる!」

この場が墓場になろうともだ。

コトシラは、構えた。

「うおおあああああああ!」

全速力全身全霊を尽くし、語彙では表現できないそれを避ける。

この局面では、成功といえる華麗な回避を醸し出した。
無傷で避けたが、次の段階で二波が食らいついてくる。

とっさに、語彙では表現できないその右斜め下に転がり込むが…

ビッシャ

「ぐうあああああああ」

転がり込む際、左手をもつてイかれた。

大丈夫か?大丈夫じゃねーよ。

三、四、五、と次から次へと、それが集中的に進撃を狙う。

瞬きすれば、軽く三十匹はいる。

終わったな…

此処はもう、どうにでもなれ…

「古見子ー！ー！…こうあああああああああ」

変態じみた奇声で告白した彼女の名を呼んだ。

「全く、しょうがない子ね…：助けてやらない訳ないじゃない」

古見子さんの声と共に、体が見えない糸で操られる。

スン

スン

スン

圧倒的な無駄のない動き。

語彙では表現できない朴念仁なそれは、まるで、まともな、ついてこない。

「何が起きた？」

自分が自分じゃない錯覚…何だか、別の体のよう…

そこには、『それ』しかいなかったが、ちょっとだけ、ほかの存在の温もりを感じた。

「コトシラ君、分かってないようだから言っておくけど……、」

彼女は言った。

「……私^があなたを操縦してるのよ」

次回
幕完

回想終了

なる程、分かったぞ。

お早うは、あくまで王覇陽なのか。

ざるそばパンは、流行らない。腹を壊しそうだから。

昨日の今日で、味覚が変化したのなら都合がいい。このざるそばパンを美味しく頂けるのだから…

さてさて、今日は漸く、期待の面接地味な試験の日。

試験開始の時間まで、目測で五時間ほど、全然まだまだ時間が余るといえる。

「今日は、わつくわくの第二次、試験祭りだが、古見子さんは何しとく?」

お茶を啜りながら、おれが古見子さんに尋ねた。

「…そうね、予定はないけど、暇つぶしでもして、待っているわ…」
昨夜の出来事以来やる気喪失している、古見子さんは、いつも通りだ。

元気がないのではなく、平常心をわきまえているのだ。日常茶飯事

だ。

どうでもいいけど、古見子さんの家族達は、何をどうしているの
だろうか…

観たことも、会ったこともない。匂いもわからない。

それどころか、彼女の招待もつかめていない始末。頭のアバウトな
記憶の棚に、この人イトコだ。って、収まっているだけである。

男性として、詮索は避けたいところだが気になる物はどうしても気
になる。

このまま、試験なんて止めて、古見子さんと冒険に出ようかと思う
ほどだ。

「暇つぶし…か。其れ即ち、時間の無駄遣いだけど、遣ってて楽し
いか？」

大抵、イマイチか、遣るにとしては、とか、言葉が出てくる典型的な
言葉の流れ。

「イマイチ…もしくは、面白くは、無いわ」

それもそうだろうな。

「試験が終わったら、旅でもしようか、みたいなこと自分で言いふ
らしていたけど、期限を放棄して、いま行くか？」

自分の言葉に、責任を取らないおれは典型的なアレだな。

「それも良いけど、今まで遣ってきたことが台無しになるわよ？それでも良いの？」

どの部分を切り取っても、まさしく正論だ、と我に帰る。
一応、分かっていたことなんだよね。此処までの努力と知識の蓄積が中途半端に、役無しになる事ぐらい。

「良いわけではないが、でも、あきらめても良いと思うんだ。」

昨日の今日だからな。あんなことが在ってからの、今は、昔の自分と少し違うと思うし。

当たり前前なのが当たり前前に出来ないオレだし。

投げ遣りに身を任せてもいいんじゃないか？

「弱いわね。私もそうだけど」

その通り、強う訳がない。昨日の言葉も嘘だったになるかもね。それでも、一人の人間だし、死ぬのは怖い。全然健全者だ。

「だから、さ。俺にも、少し語らして、」

完全に、試験に逃げ出す方向へカジをキったおれからの言葉。
届け、届けだろ。

「…語っても文句や反論はしないわ。だけど、私からも一つ言わせて、」

どうぞ。古見子さん。

「語るなら、不抜けた感じで語って貰える？」

!

くっ、大打撃だ。その台詞には、重量感が掛かっていた。古見子さん以外と怒ったときはエグリを使ってくるんだ…新しい顔だな。

「面接の際に、話すハズだった将来の事について、堂々と語って良いか？」

現段階では、質問の領域、語ってはいない。

「言つてご覧なさい？」

吐露する。おれ。

「おほん、では…」

将来、おれは、世界中を旅して、いろいろな物を観て、色々な景色を見て、歩きたいです。」

終わり。何て短く簡単にまとめた文章だろうか、自己評価はどのくらいか…

「…」

盛り上がりには欠ける、発表会。もはやこれは、小学生並みの朗読パティー。

「私からは何も言えないわ…」

飽きられたのか、返す言葉もないのか、どっちも同じ事か。

「よし、旅の準備をしよう」

本当、何もかも意味がなかった。

コトシラ達は、旅の為の重要な道具をまとめ始めた。サバイバルナイフを基準として、紙皿や紙コップ、そして、割り箸を備えた。

これは、まるつきし小学生のピクニックと同等、笑われてもそれはそれで、仕方ない。

「ゲーム機とかも、持って行くの？」

電力の供給のままならない、旅路でゲームは荷物になるだけだろ？
… 思い切って、捨ててみようか？

「持っていけるはず無いだろ？異能と特殊能力を孕まないと、確実に行って良いほど無理」

退屈な旅路になりそうで胸が苦しいな。ゲーム機がないと楽しめない直感的に、思想するおれもどうかしているのか…

「あ、言い忘れていたけど、武器とかしっかり、手入れする補修用専用箱をバックに入れとけよ。」

旅には、獣鬼は付き物。忘れてしまいまでおれは落ちぶれてしまったのか… 下らん宗教の底辺知識を蓄えた所為でもあるのか… 本当何だったんだろアレ。

おれには関係なくなつたことだから、清々と不可思議に思えるんだろうね。

この世の意味が分からない。

「あれ？コトシラ君は、あの禍々しく漆黒色の大剣を背負って持つて行くの？効率悪くない？」

持つていくとは、一言も入っていないが：補修用専用箱イコール自分の武器を持つて行く：につながつたのだろう。ここは有無を言わざるを得ない。

「無論勿論さ、邪魔だなくと思つたら、ポイ捨てすればいいだけだし。もし、獣鬼等の化け物が襲い掛からば、俺らは何をどうすればいいのか、明白じゃん」

ますます、軟弱な起因に満ちていくようだった。

何かが変わったのは、おれだけだろう。ゲーム世界で体感した現実味の無い思想。

手に入れたのは、愛？

違う。当たり前が一番麻痺することの恐ろしさだ。

今のおれは、現実逃避を行っているんだ。逃げるだけで、最悪の選択肢。

現実と闘うわけではない。現実は敵ではない。敵であつて欲しいのは、運命だ。

「そうよね。わざわざ、危険な旅路に成りかねない様に、備えるのは、賢い判断ではないわ。」

古見子さんは、二刀小刀を持ち運ぶ。彼女のお気に入りと誰もが一致文語を並べるであろう。

と、おれも部屋の隅にホコリをかぶった、黒刀を取りに行かないと、

…

コトシラは、日用品あふれる居間から、飛び出し、自室へと向かった。

「行つてらっしゃい。」

と古見子

「ああ、行つてくる」

とおれ。

家の中は、冷たい空気と澄んだ空気とが降り混じり、殆ど同型類の気体なので何とも言えない。

廊下を渡り、ドアノブを半回転させた。

目に映る。見慣れた空間は、一つの世界を物語っていた。

「おれが、数年間過ごしてきた部屋…」

おれが幼少期の時に書いた落書き、今のおれよりガキだった時に書

いた落書き…

眺めている内、言葉通り儂げに散る夢のような気分誘われる…

落書き…してみようか。

何を言い出すかと思えば、落書きをしようと呟いているおれが居た。年を重ねて変わっていく感性。

ずっと後に、分かってくる過去の自分の素晴らしいき営み。

奇麗事だと、罵られてもいいが、おれに取っては、すべてが本物、どんなときだっておれはおれだから…

落書きの散乱する酷い壁に、マジックペンでこんなことを書いた。

『今のおれがここまで、情けない人だった』と、

意味は、この日を境に、おれの変わる人生観に対しての暴言だ。

コトシラは、マジックペンを元に戻し、ホコリまみれの武器を手にし、扉を閉める。

キィイ、ボタン

寂しさや切なささえ感じる…

次回

試験
廃止

旅路に、足を踏み出す一歩手前がこれほどまで、長くなるとはな。

正午を廻ったところだ。

昼飯は、ジャムパンで済ました。問題ない。百パーセント全力で歩ける。

目的はない。取りあえずひたすら歩く。

歩いて歩いて、世界全土をこの足で踏み確かめる。何、恐怖とか、武者震いとか、全然。大丈夫だ。

端的に言う運動だ。

そう運動…

この運動に名前を付けるのなら、

目的探しの旅と名札を立てても良い。

目的地なんて、歩いていく内に見つかって、歩いていく内に、見失うもの…そうは思わないか？

ちよっぴり、脳内をくすぐった感覚がしたので、古見子さんに話すことにしよう。

「ねえ、ねえ、古見子さん。目的地を探す旅って、格好良くない？」

おれの精神年齢は、小学高学年並みであるうさ、けれど、恐れることとはない。体の方が少し早走って、大きくなっただけさ。

一方では、古見子さんも等身年齢的には、おれより一歳上のイトコで先輩だけど、彼女もどちらかというところ、心は幼い方であるところ…

「主語が抜けている様だけど、つまり、宛先のない封筒をポストに突っ込むくらい、格好いいって事？がいいたいの？」

え、理解してない上、凄く解りづらい例えまで提供しちゃってるよ。

「違う、違う、おれが言いたいののは、『目的を目指す』の目標があるが、それを差し置いて、『目的を探すのを目指す』って、工程が遠慮過ぎはしないか？って、格好良さだよ…」

ゆとりのある行動や言動：人類は、それを有意義と唱えた。

「仏教の道德教育みたいな振る舞いね。」

古見子さん言葉を使って、簡潔に一言で言い切ろうと言う必死さだけが伝わる、それが好きだな、私的に…

「駄弁は、歩きながらも出来るし、戸締まり律儀に気を配ったし、旅だしの一步を歩もうか…？」

急かすように、話を進めるコトシラ。

「…なら、私からも一方的なお願いを言うわね…一度、踏み出したら、背後の景色は観ないことにしましょう。」

良いわね。の古見子さんの語後に、賛成の意を首を縦に振る、のジエスチャーで応えた。

「扉の向こうには、見慣れた村が広がるのを始めに…のちに、今まで隠されていた財宝のように、次から次へと新しい景色が目に見え付くんだよね？」

言葉だけなら、ロマンチックだ。言葉なら綺麗な言葉だけを並べられる。

あくまで、これは好意の語句をわだかまっって言っているわけではない。

訳すと、好きで言っているわけではない、になる。

「そうね。卑劣でえげつない。世界も観れそうだしね。」

その通りだよ全く。

あ、そうだ。

おれは思いました、僕の頭の中の脳内思考回路に、ワード検索が掛かった。

コトシラは、国語と数学が苦手です。そのコトシラがだす、演出に適した行動パターンがポロツと、出てきたのです。

男女、歩く、始まり。

ふふ、分かりましたよ。

こんな時は、アレしかないよね。

何かに、取り付かれたかに思える不気味な笑みと微笑みが愛くるし

く合致した。

「古見子さん！」

コトシラは言った。

「何よ？気持ち悪い……」

毒舌な饒舌に怯んだ。おれ。

だが、めげない。

「手を繋ぎましょう」

こつちから言うのも、新鮮味があつて良いな。こんな企画は、おれの方から積極的に押し進めるとするか…

世界がパーと広がる錯覚が拡散した。

「…」

面白い物を見物する有り様で見つめる。

照れはしない。徹底的に真顔で対応。

「面白い一言ね。今度からは、そっち方面を任せることにしたわ。」

どうやら、株がひとランク昇進したようだ。

それでも、試験放棄の件は、まだ、返済できそうにはない…

「わかった。…出来れば、次からは何となく自分のタイミングで提

供するんで、色々問題点があるとと思うが、広い心でご理解を…」

おれも多少は、チキンなのでここその時に、アプローチが欠けたりしそうだからな。コレだけは、前もって分かってほしい…

「皆まで言わんでもよろしい。暗黙の了解よ」

ま、今、何より優先することは、おててを繋ぐこと、何の支障もない。

単なる握手だ。

「じゃあ、ん〜と、え〜」

現在位置は、家内、玄関入り口前。

靴を履いて、荷物は所持中、準備万端と言える。

正面には、扉、すぐ横には、イトコ。

決意を込めて、よし、とか言ってみた。

「よし、それでは握ります」

落ち着いた面もちの彼女は、何処までも、穏やかだ。

余りに、大人しい為、「人形のような無生物」、とでも例えられそうだ

と

心構えは、澄んでる。

震えているのか、周りが揺れているのか、幻覚に煽られた気分で、彼女の手をそっと、握る。

鮮明な描写は、言い表せない。

取りあえず、イトコの手を握っている。
人の手で、自分と異なる異性の手。

以上を上げる。

「さ、行こうか、未知なるそこへ」

飛び出すようにして、ドアノブに手をかける。

始まりは手を繋いで…

おれが答える演出名だ。

ガチャ

ギイ

扉をゆっくりあける…

午後一時前くらいの芳しい日差しが一斉に、照りつけた。

「外、懸念していたほど寒くないわね」

開口一番のそれは、意外性に格段と特化し、咽せるほど吹くところ

チャリン

鈴と大昔に流行った珍キャラクターの繋がれたカギ。

合い鍵はない。これ一つだけ、

…家族を失ってから、このカギに触れたものは誰もいない。

おれの家族しか触れていないって事は、家族だけしか、触れない物
って解釈も有りだろう。

「あ、ごめん。おれ左利きだから、カギを扱えないんだ。古見子さ
ん代わって…」

さり気ない言葉を贈る。

「何よ。独りで何にも出来ないの?…全くしょうがないわね」

コトシラは、古見子さんに鍵を手渡す。

次回

旅蛇尾

千里万里駆け巡る。他愛のない会話を進める物語は、つまらないのだろうか？

現実離れた、今回の行動。神様が居ると仮定したのなら、一般人には到底出来っこない怪奇な定めをきつと、おれらに与えたに違いない。

おれ、通りすがりの田舎者と、彼女、住所不定、家族構成皆無のイトコ、は道さえも整備されていない歩道を二人歩きしている。

現在位置を確認してみようか。

村と言っても過言ではない村を、歩き続けいる末路だ。

段取り持つかめていないからこそ、枝が倒れた方向に、直進している。

枝が不規則な道筋を、定めるのも、神様の仕業なのだろうか？

王国最大の都市、…から離れていくのが分かる。

活気溢れる地域とは、逆方向に向かうおれら。

風景や景色は、歩く度に野生化していく。このままでは、人類の原点へと辿り着いてしまいそうな赴きで、補足する。

どうでも言いように聞こえるが、これは、人間としての元凶です。

歩くだけで、猿になるから…話の流れではそうなっている。

「古見子さん、国境を越える際、何かしらのパスポートなどが必須になってくるのではないか？と思うんだけど…そうなのですか？」

以下の話の流れを断ち切る。コトシラ。

それに、連動して、重く苦しい荷物を引きずる古見子さんはこう答えた。

「パスポートなど、いつの時代の産物ですか？…私は、残念ながら今日初めて、その話を聞いたわ」

この言葉の解釈を追跡し、追求した上での日本文役に正しく並べるのは、非常に高度な分析力を伴うらしい。

これは、さすがのコトシラでも、頭を抱える。

「え、どう言う事？…おれ、さっぱり分からなかった。もう、少しかみ砕いて言っておくれ…」

コトシラは、重そうな大剣を引きずりながら、再度、古見子にコンタクトをはかる。

「伝わらなかつたの…つまりね、そんな者必要ないって事、スリルを味わいたいもの…」

成る程、成る程、危機感是一種の好奇心と同じ部類に、分布しますしね。今言ったことも、解らなくはない。

コトシラは、納得の色を見せると同様に、不安感が悪寒を誘ったりした。

でも、心配ない、今までも何事もなかったように、これからも、なんとかなるさ。

「…賛成で決まりだ。無いと分かって、びくびくするより、無いと知っていて、堂々とした方が潔いし、俺たちらしい。」

何だろ？この愛着感、あふるる、この系統の言葉は？

昔っから、言っていた様で言っていない矛盾と良く分からなさ加減は…

前世で言っていたのかもな。

勝手に理由を付け、勝手に納得したコトシラ。

古見子さんもその言葉以来、口を閉ざし、話そうとしなかった。刻々と、時間だけが過ぎていく。

歩いていく内に、段々と、畑も見えなくなり、完全な平原と化していた。

ずっと奥には、森が見える。此処まで来れば、道なども何も無い。本当のは、今までの世界なんて、幻だったかの様な素朴と過疎が心を打つ。

「地球って、誰が丸いって、決めたんだろうね…丸かったら、どこ行っても、隅や端で落ち着かないじゃないか…」

人は、放牧には不向きな狭い動物ですからね。特に、日本語をしゃべる僕達なんかは…。

「それは、心の広い人に決まっているじゃない。そうでないと、地球が太陽の周りを回っているなんて、思いもしないわ。」

根底を覆す一言は、なんだか、癒された気分誘われる。

これぞ、反抗精神。反発したり、素直に認めきれないのは、それなりのプライドがあるからだ。

特に、認めたいが自尊心が阻む一時なんて、観ているだけでまるで鳥のようなつかきぶんで気分がいい。

と言っただけの話だ。

「肯定論理を覆してやろうかしら？」

爽やかな草原の揺れる音。

さり気なく芳しい、草の匂い。

きつと、それは叶わぬ夢かな。

「…無料、だと思っぜ。」

「ふん、言ってくれたわね?。…なら、その理由を五文字以上で説明してくれる?。」

言っなれば、創始者には慣れないと、簡潔な文書を現せば良いだけ。

「殆どの開拓者は、皆男だけだと言っぜ。」

これが越えられない何か隔てる壁。

「確かにそうね。…何故そうなのかしら？」

うん、おれも思う。何故そうなのだろうか？

多分恐らく、そこには、見えない力が均衡を保とうとしているのだろうか？

「面白いことに、不平等がバランスを保つことが良くあるご時世だ。暗黒物質のような次元の違う、不確定影響の沙汰ですぞオ」

不確定影響とは、未知の人では想像もつかない世界を構成する部品

「基本賢いのね。あなた」

馬鹿を賢く言っても、哀れなだけだぜ。なにせ、馬や鹿のような英知しか持っていないし…

「あ、一つ疑問点思い付いた。…賢いかどうかは自分で決めるものか、それとも、他人が決めるものか…」

「まっつて、何か近づいてくるわ。」

疑問文をあげる前に、言葉を割り込まれたコトシラ。何かとは何か？これでまた、口論できそうだ、などと考えていたのは、彼女は知らない僕だけの秘密だ。

「獣鬼か。この辺の獣鬼は希少価値が高いと村人がすれ違いざまに訊いたことある。ぶっ倒して、遣ろうぜ」

動詞を組む。荷物を大地にそつと置き、大剣を構える。
イトコの方も既に、小太刀を手にしている。

二時の方位に、確かに、怪物のそれが居た。

一見、サイの様な形容。突進攻撃はダテでは無さそうな物腰。

「一撃で決めてやるわ。とか言いちゃいたいわ」

そう言えば、前々から思っていたけど、獣鬼つてなに？

人からしてみたら、自然界に不適合とは思わないか？

普通は、俺らと同じ動物は家畜かペットとして可愛がるが、獣鬼は生物出すらない。

手地の固まりと同じく、タンパク質によく似た構成物質の塊だ。彼らに意志など無い、ゲームの奴らと同じ何かに動かされている。

「陰謀だな。」

その掛け声と共に、揺らぐ獣鬼。

先手は、俺らの方が早い。

イトコの機動力は、とある学校で有名になるほどの出来た動きだ。

ガサガサ

獣鬼は、翻弄されていることにも関わらず。突進する。

「直進攻撃とは、何にも考えていないぜオ」

これ待っていたかのように、大剣をこしらえる。

一撃入魂で獣鬼を葬る。

その間に、イトコは獣鬼の外装を剥ぎ取る。手慣れた手付きで顔面部分からこまめに、剥いでいく…

移動対象物をよくはぎ取れるもんだぜ。おれのカンカツではないが、負けた気分がする。

「はい、剥ぎ取り終了。思う存分叩いて良いわよ。」

その合図を待っていたかの様に、大剣がギミックを起こす。

ゴゴゴゴ

と機械音が奏で、さらに、

ガシャゴキ、シャガッ

リーチが伸びる。

横に振るか、縦に振るか迷ったが横に振ることにした。

居合いの構えと、黒き熱風が俺の周りを取り囲む。

タッタッタ

獣鬼が眼前何メートルかで、おれは動いた。

「一撃残光横なぶり。とか言っちゃって」

軽く衝撃が走り、ジェット機のように加速する長刀は円心に沿って半回転で獣鬼にぶち当たる。

バジエコ

旋律の一瞬。

次回
憚り所

変形型の武器とは、近年よく見られる代物。けれど、この武器は最悪すぎる。

コトシラとイトコは獣鬼の肉片を回収し始めたところだった。液体質な物質は、含まれておらず、変わりにジェル状の肉質が溢れ出るだけで生き物としては、甲殻類に当たるのかもしれない。

でもそんなのどうでも良い。おれがタチが悪いと思いが当たる部分は、獣鬼の体質とは異なる別の場所、…こんないかがわしい物を食べ物と認知してしまう人が怖ろしい。

いろんな意味で怖いのは、人間の方ではないか？

と、思うがままに語らうコトシラ。脳内限定であるこの討論は、貴重品だ。

一方、現実世界を垣間見れば、獣鬼のそれを圧縮収納箱に詰める地味な作業だけだ。何の面白味も感じられない。

「よくこの凄くどうでもいいこんな場所、よくよく、現れたりするもんだ。陰謀とか人為的何かが裏で糸をヒいていそうな予感しかない…」

ぼやく。眩く。どちらかで言ったはずだ。その眩きに、対してかは解らないが、古見子さんが言葉を紡ぐ。

「草原と言う舞台で死にたがっただけじゃないの？」

獣鬼出現は、ただ切り捨てられるだけの局面を迎えるだけで、獣鬼は死ぬだけ…の考え方が定着したのは人類の技術の進化の課程と言える。

死に場所まで求める、獣鬼もどうかしているか…って、それでは獣鬼その物に意思があるのを認めているだけじゃん。

「獣鬼の寿命は、無限、誰かに機能停止を強いられるまで動き続ける…その点を押さえると、古見子さんの云う通り、何百年何千年可動し続ければ、自我の覚醒も有りって話に納得が行きそつだ。」

皮肉で悲惨だな。無限に生き続けるって事は、地獄と何ら変わらない。確かに、死にたがっても仕方ない筈だ。

よし、と、収納箱に出来るだけ質の良い箇所を容れ終わったコトシラ。イトコも同様。

本当なら、もたもたしてられない適所に居るのだが今更、急ぎ足なんて疲れる業はしない主義なんだ。

立て膝を突き、立ち上がる。近辺に転がる大剣を拾う。

「もう、いいか?…ほら歩くぞ」

日が暮れるまでは、どこか親切なお人の家などに住まわないと往けないミッシヨンがあるんで、強制的に揺さぶる。

「こちらの方こそ、あなたが終わるのを待っていたのよ？早く歩くわよ……」

現場を垣間見れば、悟る。おれが大剣を手に取るモーションより、古見子さんの刀を収めて次の立ち上がる方がよっぽど、早かった。

誤差は三秒ほど、でも、送れていることには変わらない。負けたら潔く云いたくなる言葉を言うとするか。

「悪かったな。行動が的確じゃなくて……」

平然と前を向く。コンパスが無くとも何処が進むべき無知かは分かる。

只、歩数を延ばす俺らの行為は無意味と言えるが強制されて、今を本当の意味で居きられない輩の方が殺人的だぜ。

ザガーザガー

大剣を引きずる音は、比較的暖性音域、心地がいい。これも訓練の一つといいざるを得ない。

背後には、イトコの気配。イトコは云った。

「荷物を持って、武器を引きずる姿を想像するだけでユニークと思えるのに、この角度から見るとあなたの姿はより恍惚に滑稽よ？」

ありがとう、ほめ言葉と有り難く受けつけて置くよ。

「引きずるのも大変なんだぜ。特に肩に負荷が掛かるし……」

これから、何里何万里も引き摺れば、きっと、腕が肩からもげる。大げさな表現で済まない。

「肩に金具でも、はめ込めば、ましになるじゃないの？冗句とかじやなくて…」

彼女がここまで冗談が好きなのとは思わなかった。冗句を口に出して、これは冗談ですって、表現の仕方が何とも素敵。

「まず、体を弄るなんて怖くて出来ないから遠慮しておくよ、心遣いは何とも思えないが…」

そろそろ、眼前に森が見えてきた。森の中は危険がいっぱいだから、先に云っておく。虫や害虫が最も強敵です。

「森が見えてきたわね…あ、云わなくても解るわよ。」

古見子さん、空気呼んでよ。此処は頂でしょ。

「此処からが本調子だ。まだまだ、旅は始まったばかりだ」

足にたこが出来そうなほど歩いて、何を云っている？俺は、戯言を話したただけだ、何もいっていない。

「威勢が良いわね。若いつて、頂云う言葉も口外出来て良いわよね」

古見子さんも十分若いと思うが、必要以上に遠慮しているのかな？

「森と野原の境目で、休憩しようか。」

ちよつと、此処まで無理していたから、休むのも大切ですよと云わんばかりに、僕から提案した。

『もたもたしていられない』あの言葉は何処へ行ってしまったのだろうか…

「良い案ね。見直したわ。カタニカナグ君」

肩に金具、日本人だとあり得る名前だ。カタニ、カナグ。いいね、この呼び名もいいね。

「それ気に要つた。次からカナグとか、カタニとか言ってよ。」

コトシラ、不細工な名前だと大昔に、ずっと思つて、考えないようになしていたがその抑止力も臨界点を突破したらしい。

名前に飽きた。

誰か、出来るであれば、変えてほしい。

ポロツと発言も侮れないな。

「いやだわ、コトシラと呼ばして…」

否を申した。

「そうか…そうは残念だ。…なら、俺が古見子さんの事、カタニと云つていい？」

名前は大切だ。自分の愚かさを教えられた。古見子さんやっばスゲ

！。

「だめ」

「なら、敬意と自尊をはらんで、コミさん」

一瞬の拙劣。ゴミとか言ってしまうそうだった。

「ゴミにしか聞こえないわ。けど、悪くはない…」

コミコミパーティーだ。森と野原の境目でコミコミパーティーをしよう！

「折角だし、森野原の狭間でパーティーでもしようか？」

計二人のパーティー。絶対的に盛り上がり欠ける素晴らしい会合になりそうだ。

「パーティーは良いわね。そうと決まれば、森野原の境界まで駆けつくてのはどう？子供臭くて良いと思うわよ」

く、企画案を先取りされた。屈辱的だが全然悔しくないのは、完成度の高さの点がアレだからか？

「良いぜ。受けて立って魅せようか」

正直、大剣が邪魔で走れません。

「なら、号砲はあなたが担当ね。後ハンドとして、遅く走って観せるわ」

どっちもどっちか、勝ち負けなんて自己満足か自己満足か自己満足でしか満たされないし、勝負自体気休めな子供じみた遊びの方がよっぽど増した。

「満足のいく勝負には成らないと思うけど、全力を尽くすよ」「たわごとだぜ。全力は出すけど。」

「早く始めなさいよ」

解ったよ。全く穏やかなのかセツカチなのか、困惑させる口調に成ったりするから、困る。

「いくぜ、よーい……」

両者、決めの良いスターティングポーズを撮る。

次回

森野原の狭間で
パーティー

「始め！」

森野原って、地名ではないと思うけど？

コトシラは、ちょうど良い所に放置された岩に、腰を下ろして、一休みしている。

古見子さんと言うと、どこかへ消えてしまったようだ。此処には居ない。

まあ、考えて見た所で何かが手にはいるわけでもないし、彼女は初めから居なかったことにしよう…。

日も暮れ始め、寒くなってきた。寒いんじゃない、肌寒いと自負の念を押しの方が良いな。

：

平原の彼方には、小高い山とふもとの村々が微かに、黄昏の風を仄かに醸し出す。

奥には、暮れなずむ夕日色の太陽が眼に映る。

眼球が溶けそうだ。

何時もの今日が訪れていたのなら、おれは此処には、腰掛けて居ないことになる。

…椅子の上に座っていたはずだ。

きっぱりと定められた掟を破ったのだから、こうなるのも当然。

生きている内に、この岩肌を売れることも出来やしなかったかもしれない。

次の瞬間には、明日なんて無くなるかもしれない。何時もと違い、新たな世界観。

世界中を旅して、あの街に無事に戻ってこれるとも限らないし、地球を一直線に進み、元居た街に帰って来るとも、可能かどうか分からない。

知らないし解らないことだらけだ。

どういった理由で、生きなくては成らないのか、どの場合で死んだらいいのか…

考えは、有頂天屁と誘ってくれそうだ。

「あれ？何か、考え事でもなさっていたのかしら？コトシラ君…」
クールに冷めた描写で、オレが岩に座り考えているであろう、その生きた彫刻を意識しているそれに、古見子さんが語語を飛ばす。

語語とは、所謂言葉だ。

そこまで難しい顔をしていたつもりではないが、何かを考えていたと察し、されてしまったようだ。

「考えていた？、ああ、考えていたさ。…今日は野宿か！ヤッターとか考えていたさ」

率直に野宿が頭を取り囲む。此処は、潔く野宿で決まりだ。テントも在るし、寝袋だって完全所持しているし、文句のない備えだ。

風呂が入りたかったが、携帯便所も携帯風呂も開発されていない。時世だ、文句は言えない。

「野宿とは、大変選び難い選択肢ね…何処かに、平民用の宿泊施設でもあつたら、話は別だけど…」

そんなまで都合良く宿が分布している世界ではないだろ。旅路の道のりは、デートのように甘くはない。

「この近辺に、異端錬金術式使いや魔女が住んでいるって、地図帳に乗っていたけど…」

おれは、自分の口の利口さに驚かされる。思いも寄らぬ言葉を時々、口にしたりするがこんな時だけ役に立ってくる口も、悪くはない。

そういつて、野宿だ野宿と、わめいていたおれも冷静に、地図帳をリュックから取り出す。

「魔女とか…私、ちょっと苦手なんだけど…」

魔女とは、延命や美肌の代価として、若い女性の生き血を啜り採ったりするらしい。

おれには、関係ない話だ。

「それを云うのなら、おれだって完全に異端錬金術式使いもご遠慮させていただきたい所だぜ」

異端錬金術とは、若い男性の体をいじったり解体したりして、楽し

む輩。女性には手を出せない男性の群れが殆どらしい。

チキンな奴らだぜ。

「あつた。へー結構近くにあるじゃん。」

とかなとか、だべっている内に、地図帳は一つの屋敷を示していた。

「地図帳に載るほど有名な場所なのね。魔女だったり、異端錬金術式使いだつたが住むアジトって…」

秘密基地を隠したからない連中だつたりするのだろうか…

まるで子供だな。おれも混ざりたい…

そんな場合ではない。もう薄暗くて、文字や絵図が確認に出来なくなってきた。早めに、観ないと、今度は電灯探すのに時間がかかる。

コトシラは、双方の眼球を凝らして、正確な現在位置と、その近辺に在るといふ屋敷との座標を頭にたたき込む。

…

「どつっ？そこに行けそう？」

古見子さんが執念深く地図帳を見つめていたオレに訊く。

「嗚呼、どうにか、場所だけは覚えたが…本当に行くの？」

ふーと、一息ついて、喋り出すおれ。位置関係はほぼ確認はとれた

が肝心の屋敷の名が読めなかった。

なんだか複雑に造成された字が見て取れたが薄暗い上、印刷がうまくいっていなかた為、読めなかった。

「私的に述べれば、まだ、危険をかえりみず暖かい布団にくるまる方が良いわ」

彼女らしい判断。訊くまでもなくそう、答えるであろうは思っていたが。

おれもその意見に、否を配ることはないな。

「大丈夫。おれが守ってやるよ。」

おれが言つと天地が逆転しそうなくらい上辺ばかりな発言。

彼女は、

「…、ありがとう、嬉しいわ。」

彼女も心が詰まっていない空疎な言葉。

「兎に角、とりあえず、決まりつて事で先に進もう。」

喋ることは、歩行中にでも幾度となく話せる。まずは、今すぐ、この場から動くことが重要。

ガササー

重剣が地響きを立てる。それ程大きな音ではないのはやぶさかだが…

「そう言えば、今日、試験じゃなかったかしら？」

その通り、試験日だ。今日を境に試験だったに変わる。

「何を今更、云っているのだい？おれたちは試験日をすっぽかしてここまで来たんじゃないか」

おれたちではなく、おれは、だ。

「…だって、本当に良かったの？って答えたら、考え込みそうじゃない。だから、今からでも引き返せる話をしたいの…」

？全く話が読めない。彼女は僕の心の強さでも、測ろうとしているのか？。

なら、オレはハッキリ弱いですって答えられるけど？

「コトシラ君は、過去に戻ってやり直したりしたい？」

展開が狂おしいが、彼女の特技と言う事にしておくか。

「過去なんて安っぽい舞台に立とうとは思わない。だって、ゲームが旧式だもん」

過去は省みない。過ちなんで、観たくもないし変えようとも思わない。

「…ごめんなさい」

いきなり唐突に何だ?!

一体、おれに何を求めている!。

「いきなり謝って、何だよ。軽く意味が分からない。」

理由は何だろう…

もう辺りも真っ暗で、彼女の顔も見えないがし、どういった表情をしているのかもわかりやしない。

ちなみに、今向かう屋敷の場所は解る。

超方向探知九百四十七点のこのおれがなせる技だ。

「私、あなたをゲーム世界に送り込んだの」

若干驚いた。

「え、…」

「私、昔っから、人を別世界や異世界に飛ばすことが出来るの…」

衝撃発言だろうが、全く持って違和感がない。これは俺が麻痺しているからなのか?

「ちょっと、待ってくれよ。…その、人を送る力に関しては偏見は無いが、どうして、俺をゲーム世界へ送ったんだ?。それが唯一の疑問だ」

正直に訊きたい。その理由。

「云って良いのかしら?…」

「ああ、云って良いとも、遠慮なくどうぞ」

真っ暗で見えないと思うが、優先者を譲るようなジェスチャーをしている。

次の言葉を待っていたかの様に…

「あなたの、コトシラ君の愛を確かめるために…やりしました。」

次回
屋敷な宿主

なんだ、そんな理由か。

他人の深層心理を見切るのは、人だと理解されない点があるからな。けれどもそんなこんななこの会話を何とか変える十分必要があるな。まあ、彼女も勇気を出して口に出した衝動発言だろう。

ここは、次に言葉に時間を駆けたりするのは、厳禁だ。空気は淀んで、窒息死ではない、終了。その時点で消滅しそうだ。

大丈夫、おれはちゃんと人並みに好意を抱いているつもりだぜ。って言う事で、

「暗くなってきたし、先を急ごうか」

何事も、起きなかった様にのうのうと、そして如何にも、堂々と話を変えた。

「あ、その件なんだけど、話が逆変換する…私はなんと答えればいいの？」
『わかったわ』とか答えればいいの？」

そうだな、何か不自然すぎて、言葉と感情転換の辻褄が統合しないような気がするな。
着目する答えは、

「ああ、なら、取り敢えず、『あら、話を変えやがったわ』でも、言えば大概は当たり前じゃないか？」

もう、語彙不足だ遣ってられない…

「あら、話を変えやがったわ。それでは、屋敷へ参りましょ…」

此処でおれはこう答えることにしたよ。

「そつだ、行こう！」

私とコトシラは、暗闇で何も観得ない森を駆け巡る。

私たちの眼には、何かを表す光りすらない。深くとても深く、暗黙は何処までも続く。彼は、迷子には成らない…そんな力を持っているから、

私は迷ってしまう。目印さえも簡単に送ってしまうから…

足音だけが一番の光、それを追えば、目には見えなくても、出口は見つかる。

そんな気がした…

コトシラと古見子さんは、徒歩と言う名の健全な移動手段で、屋敷へと足を運んだ。

その目に映る限り、屋敷と名指しされることだけはある立派な建造物だった。

昔にそれはそれは、とても豪華な恍惚物の施しようが良い、美しい修飾品の数々が散りばめられた…

まるで、クリスマスパーティーだった。

折角の飾りで『屋敷』が虚しく聞こえる。

「ね、コトシラ君、立て掛けの様な看板が横たわっているけど、突っ込まなくても良いのよね？」

彼女が云う。指をさり気なく向けるが、観るも無惨な木版が泥をかぶって、地に朽ちていた。

「一応、この屋敷昔は観光地みたいなものだったんじゃないのかな？（ペラペラ）ほら、この地図帳、十三年前の物だし、誰も住んでなかったみたい」

勇者か、英雄…どちらかの救世主の本宅だったとかだろう。

今は、腐敗な奴らのアジトとは、皮肉も休み休み、動き動きするもんだ。

「確かめるくらいの好奇心を窺めたら？この屋敷の名くらいは覚えておかないと…色々」と

念を押す。

万が一を云いたいのだろうか？

まあ、この屋敷にお泊まりするんだし、寂れた勇者のお家の名前くらいは覚えておくとするか…。

地図帳には、旧漢字で丁寧に書いているものの読めないものは、読めないのである。

「別に、子供並みの探索意欲が在るわけではないが礼儀として、文化指定財産疑惑な建造物名を確かめるだけのことだ。しつこく言えば、それ以上でも、それ以下でもない、

ぜ」

他言畑。

コトシラはそう言つと、このこ木版に近寄つた。まるで、子供のよつな邪気のない振る舞いで…

「齟齬家」

齟齬とは、壊れた歯車。

それは、思っていたよりも、出来すぎた文字だった。

「え、ごめんなさい。よく聞こえなかつたわ」

少し離れた場所から古見子さんが尋ね掛ける。

「ソゴケだつて、土まみれで正確ではないけど、齟齬家で当たつて
いる。」

何か、言い返すのだろうか…

「カエルみたいな、語呂ね。下手に口にしたくなうわ」

低評価だった。字にしたら微妙に格好いいけど、やはり、昔の人のセンスは現代人には分からない暗黙があるだろう。

カエルみたいは俺も思ったが事実。

「これでキーワードは回収したし、そろそろ、訪問してみるか…」

此処からが本番だ。すっかり忘れていた、家の中の人は、…予想が
つきそうだ。

変な奴か、不自然すぎるほど普通の人が、二分の一で、
人数も、複数か、少数のどっちかだ。

おれと古見子さんは、横二列になって、屋敷入り口へと続く石畳状
の道しるべを歩く。

カタ、カタ

がく、カタ

踏み所によっては、不安定で危なっかしい踏み石もあるようだ。

「足下気をつけてください、古見子さん」

紳士な振る舞いだ。気持ち悪だけだが…

「心配しなくても、私が転ぶ必然性は無いわ。」

身体能力に美徳化した彼女ならではの発言だ、説得力に力がある。

ガガー

ガラ　ガラ

重剣引きずっている事柄が此处では、耳障りな効果音しかない。

この不協和音を聞いて、ヤッパ、古見子さんの美しさには勝てない
な、と自負を負担した。

「なんか、耳障りな音出してごめん。」

謝って、すまされる雑音ではないのは承知だ。けど、背中にリュック、右手にテントを所持した状態で重みのある武器を持ち上げるなんて、おれには出来ない。ひ弱すぎてごめんなさいだ。

「そんなの気にする余地すらないわ。嫌なら、私が預かるうかしら？」

言うまでもなく。彼女も荷物で両手いっぱいのような気がするのだが、どこにどう預かるのか知りたいところだ。

「いや、気持ちだけで十分ですよ。気にしていないのなら、このままで良いですか？」

口の中に、収納するとか言い始めたら困る。

「いいわよ」

ガガー

ガガー

ガガー

コトシラー一行は、やけに長い、石畳歩道を歩き、入り口付近まで辿り付いた。

佇む彼らは、

「これって、ノックすべきなのか、ベルマークを押せばいいのか、判

断しかねるから、古見子さんお願いします。」

おれはちゃんと、女性を優先すべきだと、差にを譲る。

「生憎、私もこういうのは初めてなので…ベルを押させていただきます…」

何食わぬ無表情で、ベル可動ボタンを指圧する古見子さん。

ベルルー

べん

屋敷中に音が鳴り響く。

少し緊張するのは、生理的になものなのだろうか？

ドキドキ、安堵ワクワク。

新キャラ登場の期待感が体中の血流を経由して流れる。

「珍しいな、こんな日に客人なん…」

ドアの向こうから、声が聞こえた。

ん、何か引つかかる。

聴いた事のある声質だ…。

ガチャン

キーー

「こんにちは、そしてあなた達は、何方がたでしょうか？」

正しい日本語を使えよ。

現れたのは、絶妙に親近感のあるそ이었다。

「こちらこそ、お前誰だよ」

言葉選んで、正しく使ったおれ。

「あなた、コトシラ君の知り合いですか？」

妙に親近感のあるオレらを観て、古見子さんが訪ねた。

「まさか」そんなはずありませんよ」

次回

物静かで穏やかな人

読みづらい言葉を連ねているわけではない。これが全力だから、仕方ないだけな話だからだ。

意味気ままに、語らしてもらってらって意味合いだ。これはそんな物語の断片的解釈から成り立つ。

「何処かで会いましたか？」

軽く爽やかな青年がおれらの前に、存在感を揺るがしていた。何処か見覚えがある、ルックス：頭の何処かでは、何かブレて刻まれているような気がして成らない。

青年は、本格的に大きな扉に背中を預け、もたれ掛かっている。

「何処かで会っては、いるとは思うが、他の話がしたい。」

家主とか、家族とか、組織絡みの人達とか、そう言った奴らと話がしたい。お前じゃ、話もマトモにまかり通らん。

初めに、誰ですか？とか、人物名聞き出すところから、意味が分からないし。

「どつやら、検討外だったようね…友達などの間柄なら…」

何かの挨拶だと思っていたのだろうか？

おれらの野郎のやり取りを観て、そう思ったとか？

…それは、見当外だ。

「話は、要するに、家が火事でなくなった。安らぎの空間が無くなってしまうっては、手段を選べなかつたってわけだ。」

遠回りにも程がある。

つまり、『泊めておくれよ』とすぐるような言い回しだと思ってくれ。

「はあ、成る程。それで試験も放り出すってわけか…」

青年は、語る。

「ん？、シケン？」

しっかりと、聞き取ってはいたが聞き取れなかつたフリをした。

「まあ、玄関口は寒いですし、中へどうぞ」

青年は、言わばパジャマ姿でお出迎えだったらしく、勿論、陰湿な気分誘われる。妙にムカつくって言いますか…その辺りだ。

「優しくはない。振る舞い方ね…」

腹黒い嫌な感じしかしないその電磁波を彼女も察していたらしい。流石イトコ。

無駄に、血縁からよく似ている。

「好感度は、不評のようですね。当たり前ですけど、ははは」

笑いがまるで声優だ。違和感なさすぎて逆に違和感って、こんな時に使われるんだな…

何処まで、納得の行かない人種だぜ。

日本語で回りくどくてまどろっこしいだ。

青年の言うままに、屋敷内に足を踏み入れるが、内部は予想が着くほど富貴に充ちている。

ゆとりと充実した家具、あと、ちらつと見えたが箱型PCは中々、不様。

画面を木っ端みじんと叩き割って、粗大ゴミ誘ってやるうかと思っ
た。

「結構、典型的で笑っちゃいますよね、はは」

庶民に対する冒涇だが、別に裕福だから等って羨んでいると言った、感情は混み上がらない。だって、そこに愛情といった上等品が含まれていからな。

ま、おれも付属してはいない感情の一つではあるが…

「こんな形だけですよ…」

青年は後に紡いだ。

「とてもじゃないけど、素敵なことを言うのね。中身は空だけど…」

言ってくれた、おれの言葉でもあるそれを…。もういっそ、兄弟で

もいんじゃないか？

「古見子さん、彼には、殿方とかってよ。あくまでこれは助言のつもり……」

名前を晒さない。青年に対しての皮肉たっぷりなだよね。

テクテク

青年一行は、広さがイイカゲンなりビングホールに連れてきた。今、視察した限り、青年はこの屋敷に一人しかいないらしい。物静かだ。

「此処で寛いでくれると光栄です。」

青年は、あまり騒がないで大人しくしててください。と述べた。

脳内変換もお手の物さ。

「暴れてやろうかしら……」

荷物等は、部屋の隅に置いた。おれが通った通路は、引きずった大剣の跡でスタボロだ。ざまーみる。

このリビングも、『一般者』と隔離された専用室何だろう？ バーカ
バーカ。

さて、反抗的態度は止す事にしよう。此処まで迷惑掛けて頂けてい
るのに、…失礼も有ったもんじゃない。

「君たちは、夕食とか、んーと、その、済ましたか？」

青年は訪ねる。よく見れば、同い年にも見える。

「いいえ、町外れの田舎から此処まで何も口にしていませんわ…」

彼女なりの返答。おれは口を動かすのが疲れるため、いことに任す。ゲームは出来るのにな…。

「それはそれは、田舎街から…大変立ったでしょうに…」

リビング付属のキッチンで何か作業をしている青年。

どうやら、何かの仕込みをしているらしい…

「何なら、自分の作る、食べ物でも召し上がりますでしょうか？」

正直、腹が減って疲れているため、胃袋に詰めれば何でも良しなのだが…

「うん、そうしてくれ。…青年、ゲーム遣って良いか？」

おれは、ダルそうな身のこなして振り向きざまに、テレビの下に綺麗に完備された遊具機に指を指す。

「勿論、良いですけど、自分の事は、『端袷居』と呼んでください。昔っから、この呼び名じゃ、ないと反応出来ない身体なので…」

呼び方は、タンサイだそうだ。

一つ間違えれば、天才に聞こえるが間違いなしに聞いたら、短才でほぼ逆な意味合いになったやうな。可哀想だ…

「タンサイ、私にも手伝わせてくれるかしら？」

良い判断だとは思うよ。五ポイント挙げるよ古見子さん。
スキルアップも大切だしね。

おれは、その間ゲーム遣って、くたばって置くからさ。

ああ、頂云つのを修行って言ったりするんじゃないかな？俺は、思わないけど…

「良いですけど、自分の料理は…物凄く危険ですよ？お湯で凍傷でする勢いですよ？ハハハ」

心配するだけもだだと思われるのだが…彼女に危険は、足しても無害無傷の結果に終わるだけだし…

「大丈夫、とでも前倒して置こうかしら？、物理的な危険は大丈夫です」

まず、何作るのが気になるんだけど、食べ物何だろうな？タンサイさん？

「そうかそうか、いいね、なら今日は、ピザカレーでも作るうかつ！」

定番色彩る怪しげな名が飛んできおる。この調子なら、心配なのか…

「ピザカレー…え?!、それって食べ物なの!?それとも、食生活におけるヘルシー食品!?とか、言っちゃいたい…わ」

テンション高いなー、テレビ画面越しからでも、彼の姿が想像着かないわ…

コトシラは、さめた感情を研ぎ澄まし、精神だけをゲーム世界に放置してきた。

彼の手を止めることは、不可能に等しい。

操作音鳴り響くりビング。ソファアールとテーブルとテレビを反響させ、バックで料理をたしなんでいる二人…

和むな…一生このままで居たい気分だ。

ぞっと…もしくは、おれが死ぬまでこのままで居たい…

「ピザは、まず生地をこう延ばすんだ。」

「こじ…?」

「そうそう、お、上手いね。いい感じだ」

穏やかな日常感存る会話だ。癒されそうだ。

端袈居は、良い奴かもしれないと思った。

「あ、それと…コトシラさんだっけ？襦袢破壊試験合格おめでとう

…」

ん？

次回

全部おれの妄想でしか、動いていないよね？こんなんで本当に大丈夫なの？…考えないことにしよう。

独りつきりとか、独り言とか、こうした感情論から成り立ったりするのかな？

「自分、タンサイっす。」

タンサイは、オーブンの棒状の取っ手に手を置き、内部に潜伏し加熱された円盤状の食べ物を取り出す準備をした。

様な気がしたのか、…視線は液晶モニタなので自信はない。

「味付けは良好ね。…少しコクが足りない気がするけど…」

一方、古見子さんの方だって、銀色に光沢が観られる容器の中身を警備している。

難易度イーマイナスのミッションって感じがする。

いわゆる、ランク化と評価別に認識。

…これもまた、背後で行われているため、想像範疇。

「…タンサイさん、絶対何処かで会いましたよね？覚えていません

か？」

さっき、すっ飛ばしていた事柄を今、振るおれ。

「…其れは多分アレだ…筆記試験の急に、席を飛び出したお人だ。」

黄金の香りと円盤の匂いが、室内いっぱい立ち籠もる。
は、

どうでも良いので、訂正を試みる事にした。

「いや、それは違うと思います。現にその人、おれの目の前で本当の意味で消えたから…」

シイクさんでしたよね？困惑と混乱と堂々と消えた人…

「本当の意味？…ですか…なら喰われたのでしょうか。あなたも気をつけた方が良いでしょう？コトシラさん」

古見子さんの気配が感じないのは流石と言える…ちょっと寂しいけど。

「喰われる？何処ぞの神が定めたルールだ？それは？」

話が入れ替わるのも少なくはないが、この件は変えざるを得ない情報だ。

「コトシラさんは賢い人柄みただから感づいて、此処まで逃げてきたのだと思っただのですが…違いましたか？」

初耳も此処も来ると産地直送の新鮮感しかないな。

「つまり具体的に言っていてどう言うこと？それって、試験と何か絡んでいるのか？」

やっと思い出した。こいつ、筆記試験の鉛筆を回収しにきた物静かで穏やかな人だ。

雰囲気全然別物だから、気づかなかったけど、家だけとか、少数だけとかの条件を満たしたときに発動する二枚目みたいなものだろう。

「絡んでいるも何も、これは自由と養分とを分ける分岐試験だからね。落ちるか、逃げ出すかしてみたら、神の養分組入りだからね。気をつけて、…何て気休めにも成らないね。必ず消される」

なんてこった！

そんな間抜けなことをほざけたら、どれだけ嬉しいか…

呆れて逆に言いそうだ…

大体、神なんて居るの？って、定理がまだ解明されていないだけでしょ。

神イコール何らかの自然現象なんだし、

「洗いざらいに、喰らっているのだとしたら、神は小太りしたおっさんだろ？」

フライドポテト感覚でパクパクしているだけだろ。怖くはねーよ」

宗教じみた教師等も義務教育も、神に恐れを成して、出来上がっちゃった習わしだったのか…

つくづく思いやれるとは、よく言ったもんだ。

「神に敬意を払いべきですね。早くも食べられますよ?」

いつの間にか、液晶テレビの前には、ピザカレーと些細な菜たちが群を成していた。

何処で食べようが一緒に趣向主義者で助かる…おれは、いつもの様に足の指先でゲームに没頭するだけ、後は何も要らない。

「神というのは、不適切だ。欲望まみれの奇人と言うべきだ。」

病気染みた、テクニクでコントローラーをコントロールする。

「あのちよつと良いかしら?先ほどから、話を聞いていたのですけど、神って何?」

古見子さん其れはないんじゃないかな?

あからさますぎはしないか?

「ごめんな、古見子さん僕達だけで述べまくって、…大丈夫だよ。ちゃんと、古見子ちゃんはいいい声してるって…」

フォローでしたか?こう言うの…

確かに、この青年だけとだべったり、話したりするのは、気が滅入りますよね。

「こんな意味を交えて言った訳ではないけど、正直の所寂しかったのは事実ね…」

個人的に薄い人だから仕方ない…けど、放置は良くないのは解った。これは、俺が今まで生きてきた中で授業よりも為になる知識だな。

「自分もわりと神神言っていたけど、結局、神なんてゴミミでしょっよ、ハハハ」

ヤベ、カレーがうまく感じた。

良くできたカレーだ。何？この旨や。

まるで、神がかっている。

旨すぎて鼻血が出そうだ。

こんな時だけ、生まれてきて良かったと思える自分に、涙が溢れてきそうだ。

「千変万化に、いきなりどうしましたか？コトシラさん」

生々しい涙を拭うおれに、小馬鹿にした態度でタンサイが話しかけてくれる。

「こんな時って、目から鼻水が出てるって言った方が良いの？もしくは、目の水溜まりダムが決壊したの？どうして、って答えるべき？」

おれは感動のあまり、隣に座る古見子さんに…

「両方さ！。」

爽やかに、左手を肩に回す。

この友情は、愛在る印とか言いそうな珍妙な光景。

「ちよ、辞めなさいよ！とか、行いちゃいたい…わ」

確かにこの好意は、デリカシーに欠けるな…良しやめよう。

オレは、あくまで紳士で居たいのだ。

「中が良いですね。観てるとぶち壊したいな〜と思ったりしますよ。」

喜劇な事を言っつなこの人も…

「君たちを観ている…何だか、イイなこついうのもって思いますね。…」

寂しげな面持ちに変貌。何か言った方が良いのかというと、意外と言えない雰囲気^が身を取り囲む。

「少し昔話をしようか…」

黙りこくつた僕たちを観て、深刻な威圧感を放ち話をしだす。

俺の足もだんまり。ゲームは一時停止だ。カレーは本当に旨い。ピザもおいしい。

「この屋敷は、昔、魔女が居たんだよ。ずつと、前にね。」

昔話ではなく都市ですつて落ちたる。

「魔女は一人。孤独に静かに過ごしていましたそつだ。」

童話の域だな。

「そこに人の少年が迷い出来たんだと、その少年は、死にかけ…恐らく各街を行き来する馬車などの人達が

乗るそれに、化け物が手を出し、はぐれ離れの死に損ないだったの
であろうな。」

生きていても仕方ない…か。

「魔女は少年を助けた。看病に徹した。

少年は回復。さらに元気に成長する。

魔女はというと、何だかんだで養っていたようだ。」

ここまででは、よくありそうだな。

「すると、少年が立派な魔導流行刀刃師に成ったのだよ。魔女と人
間のなせる技さ。」

魔法と武術を兼ね備えるか…

「その青年は、魔女にこんな事を言った、『僕は、人だからあなた
の為に、何か恩を返したい…けど、その前に人間としての役目を果
たしたい』と、そう言い残し、不老不死とも言える魔女を葬った。」

何処まで、人種の壁は越えられない物が在るのか…

人種では無いな。家畜と所有者。

「その後、その青年は世界中の魔女を殺し回ったとさ。…」

「あなたは…その青年なの？」

と、

古見子は言った。

次回
魔導流
行刀刃師

過度の笑いを取るうとし過ぎて可笑しくなったのか？
いや、現実味が在りすぎて、逆に嘘にしか聞こえないな。

コトシラは、彼の話信じようとはしなかった。

「嘘か誠かなんて、証拠は何処にある？と訊いてみたら、お前は迷わず証拠は無いと言ってくれるんだろうな？」

夕食会も、終わりを迎えていた。明日からは、また今日のように当てもなく歩き出す旅になるのだ。今日はゆっくり休みたい。

「え？、昔話に証拠なんて要ります？自分はただ、そんな事もあつたな…と慈しんで居ただけですよ」

とタンサイ。

「ああ、はいはい、解つたよ。お前はただ、そんな事もあつたを長々と語っていらつしやればいい。おれには関係ない話だ。」

よしまあ、食器の片づけくらいはおれ一人で遣つておきたいな。今此処で一番策に立ってなかつた事の成り行き立つたから…。

「んじゃ、おれ、先に食べたやつだから、磁器でも洗つとくよ」

コトシラはノコノコ、食器を洗い始める。

「…頼んだよ。コトシラ」

馴れ馴れしくタンサイは、綺麗に食べた食器を手渡す。

「手伝ってもイイかしら？」

横から古見子が親切に言うが俺は断った。

「気持ちは有り難いぜ。けど、此処はおれ一人に遣らせてよ。立場的なもので…」

敢えて引き受けさせない。なあに、独りで皿やお皿を黄昏で洗うのも悪くないもんだろ。

「でも…効率面なんかを考えてみても、私と二人で洗い始めた方が…」

気持ちを受け取るだけでも、こんなに困難なモノなのか？…

「いや、効率面よりも今は、お前が十分休んで居ただけで嬉しいですよ、だからね、おれは一人で洗う。」

思うまま口にしたけど、これで良かったのか、後々になって後悔するのかな？

「…そう」

残念そうな顔は、おれにとっても辛いものかもしれない。彼女の一番の敵は、おれかもしれない。

とここで、タンサイの所へ在るいく古見子。

「入浴室は何処に在るのか…解説してくれるかしら？」

タンサイは親切に教えてくれた。

次の日。

本当に裕福すぎて、腹が立つ一歩前まで誘われた。

コトシラは、ふかふかベッドで心底熟睡してしまったことに、憤りと怒りなどの感情的なモノしかこみ上げきれなかった。

止まるべきではない。よし、次から野宿だ。と宣言した。

「本当昨日は、ありがとうじゃあ、元気に独りこの屋敷で居座りな」

コトシラ、一生孤独そうなこの人に、憎たらしい言語を送る。

「嫌なこと言わないでくださいよ。自分だって、そうならないように努力してきたんだから」

古見子さんとは言つと…

「ま、みんなで仲良くリビングで寝たからいいんじゃないかしら？」

そう言う話だ。

昨日は、寂しげなタンサイの為にゲームパーティーをしたのだ。

ベッドとは、何故かリビングに放置されたベッドでよく眠れたって言う妙な話。

「それもそうですね…もし良ければ。いつかきつと、ここに再来することを願っていますよ。」

不思議と今まで、こいつの屋敷に何回も来たような感覚に囚われる言葉…

「お粗末な事を抜かすな。次はあり得ない。昨日は偶然だ。」

偶然にしては、本心違和感が感じられる。必然にしては、露骨すぎる。

ちよつと、中立を保って居るのか？

…凄い。奴だ。

「今日会ったことは、忘れた方が良いでしょうね。お互いのために…」

屋敷の門前まで見送り、最後にイチゴン言い放つ。

「では、またきつと、どこかで」

最後は最後らしく。さようならも言わなかった。

「ねえ、コトシラ君、今、目に見えるこの不思議な光景をみて驚いたりする？」

する訳ではない…。しかしと、言を並べればいいのか、目に映るのは昨日とは似ても似付かわしい風景。絵画の様だ…

コトシラ等の眼前に、広がるのは、先ほど居た屋敷。

立ち位置は、昨日初めてこの建築物をみた門の前。横には、ちゃんとした、木板が張り付けてある。

「門をくぐって、時間移動したのか？」

現在位置の確認と時間的認識の確認を照らし合わせれば、その結果にたどり着くのは、妥当。

「そんな事在るわけ無いわ。幻よ。」

あり得ないは、幻に繋がる…違う。

「幻で片づけて、この状況を打破するとは思えない」

こんな時だけ冷静なのは、矢張りまだまだ人生経験語り無いからなのか？

「嘘よ。彼にまんまとハメられた線とかがまだ良いわね…それはどう？？」

いきなり、こんな面白みに荷送り込む欠ける場所に送り込む彼の神経がどうかしてるだろ？

「面白くも何ともないから彼の仕業ではないと思う。」

うなだれる。うなだれる。

「…逆発想して、最初から全部が幻だったとかは？これは俺の意見」
バカンスな気分で、探検していかがおうか…

「そうね…その方がハラヲくくれるし、…、ハハハ、探検なんかより面白く遣りそうな気がしますわね」

狂気が芽生え始めたな。カテゴリーどんどん増えていきそうだ…怖いな。

「めっちゃくちゃ言ってくれる…怖いな、古見子さん」

あ、この人が根源的だったりして、人様を勝手にどこか知らない所に飛ばせる厄介な人だしもしかしたらの案も立てるべきだ。

「怖くなんかないわよ。怖いのはこの状況下…」

訊いて観るに一票。

「もしかして、古見子さんが遣ったとかじゃないの？能力とかで…」
その通り、で一件落着、ハズレでフリダシ。

「言っておくけど、送ることは出来ても遡ったり、反遡ったりは出来ないモノなのよ。」

時間移動不可、その前に、そこまで何なりと時間軸を微調整できるモノなのか、疑問が迸る所何だが…

「よし、分かった。これは夢だ。俺達は同時に悪い夢を見ている！」

人の夢と書いて、悪夢と読むのは、悪いことか？…いや、悪くない。

「生半可の気持ちで夢と語ってしまったら、文字通り夢も身も希望も蓋も無いんじゃないの？」

冗談のつもりだが、やっぱり古見子さんの最初からこうだったに違いないの案が正しいのかも…

「すみません。惚けたつもりで話してのです。すみません」

此処に一つ名言を納める。いつからこうだったのかな…きっと、最初からこうだったに違いない。

「前例がないのよね。人生経験上…ずっと送る側だったし、私」

送られる側も大変だろうな。と思うのはおれだけか？

「ま、この方がずっと、楽しい旅になるんじゃないか？一世代前が生存率低かったし、『イイ旅になりそうだ』の名言もいえるし…」

「そうね…」

始まりは、此処から…

次回

竜毛飛ビ

龍毛翔ル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5555x/>

アクセストロベリー

2011年11月2日14時15分発行